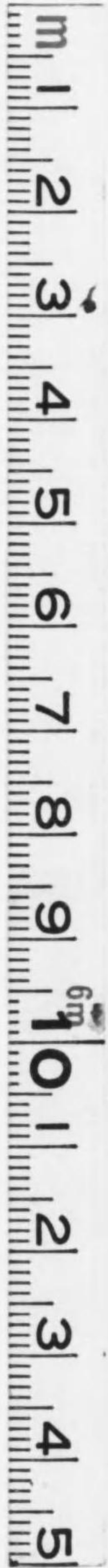


472

特 252

572

人間の叫び



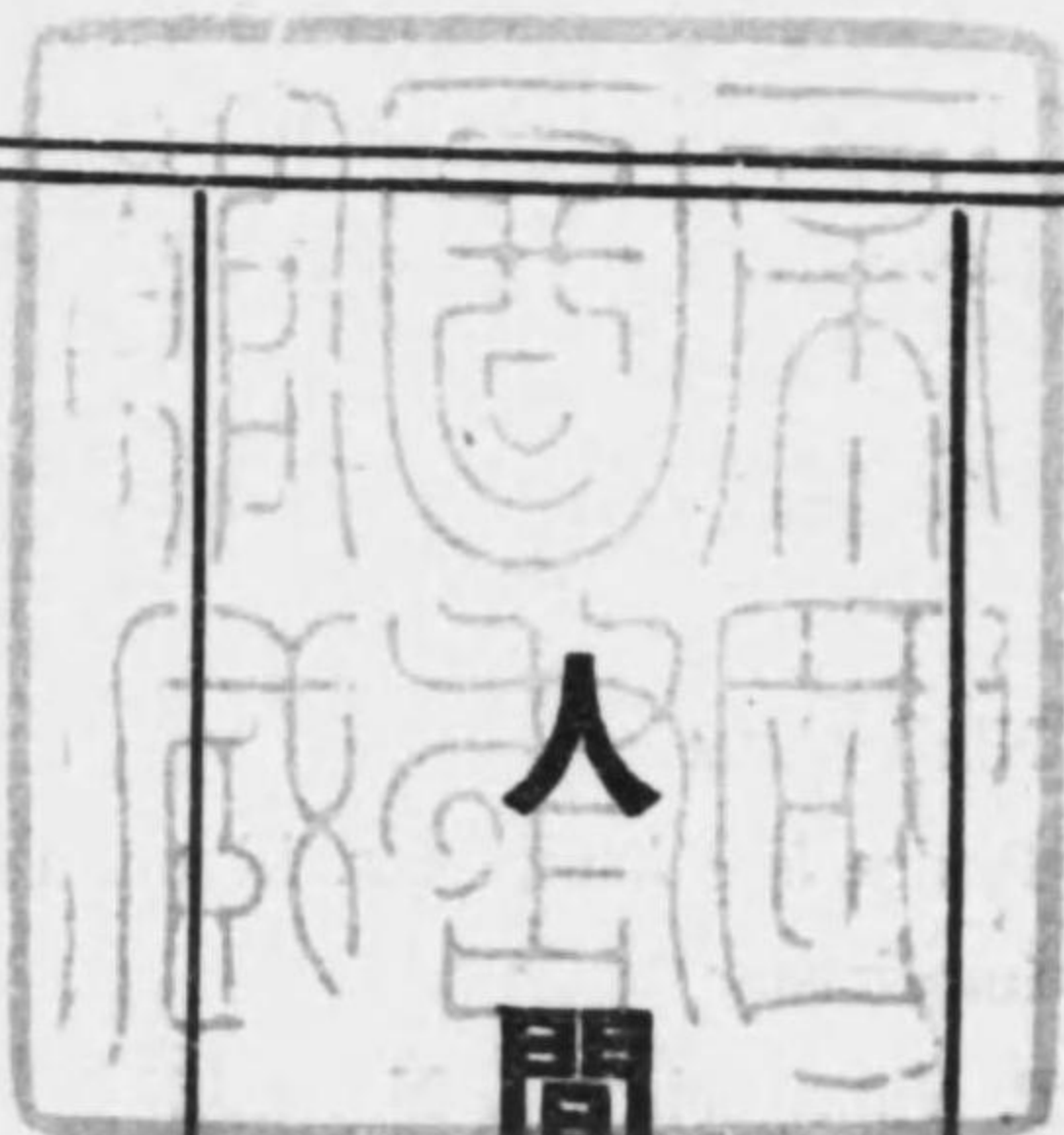
始



特252  
572

浦川和三郎師著

人間の叫び



Nihil obstat  
Paulus Matukawa cens. librorum  
Imprimatur  
+ P. Yamaguchi Ep. Nagasaki

はしがき

燈火親しむべき今日この頃は申すまでもなく、機に臨み折に觸れて、靜に心の耳を澄しますと、幽かでこそあれ、何か知ら一種の叫びが響いて來るのを覺えない人はありません。それをお聞きすてにならない様、お勸めいたしたい老婆心から、本冊子を公にした次第であります。

本冊子は、嘗て聖母の騎士誌に連載した論文を取纏めて、それに多少の修正を施したもので、出来るだけ平易通俗を旨とした積です。より詳しく研究して見たい御方はどうぞカトリック教界に廣く讀まれる「真理の本原」、「無神論を衝く」等を御細讀下さいませ。

目次

第一部	各種の叫び	………	一
(一)	感情の叫び	………	二
(二)	理性の叫び	………	五
(三)	意志の叫び	………	九
(四)	心の叫び	………	二二
(五)	良心の叫び	………	一六
(六)	社會の叫び	………	二二
結論	………	………	二九
第二部	神は存在する	………	三一

(一)	宇宙の存在から推して神の存在を證す	………	三
(二)	運動を以て神の存在を證す	………	三九
(三)	秩序を以て神の存在を證す	………	四六
(四)	道徳法を以て神の存在を證す	………	五五
(五)	人心のあこがれを以て神の存在を證す	………	六四
(六)	各民族の信念を以て神の存在を證す	………	七一
結	論	………	七八

# 人間の叫び

## 第一部 各種の叫び

### 緒言

僕は神なんかには用はないよ。起きて働き、働いて食べ、笑ひつ泣きつ、その日々を送り、生れて、成長して、老いて死ぬ、これが人間の一生といふものだ、其間に何物かを容るべき餘地が残るだらうか。人はよく斯う曰つて居る。

然し一歩踏み込んで、少し内情を探つて見給へ。その外形的表面上の活動は以て一時氣を紛らすに足りようが、それで心を満足させ得るものではない。何うかした機に世事を忘れ、身獨になり、靜に我と我身に反省して見ると、魂の底には、一種の強い、抵抗し難い要求が潜在して居るのに氣付くであらう。感情が叫ぶ、理性が叫ぶ、心が叫ぶ、意志の叫び、良心の叫び、社會の叫び、安樂を、確實を、幸福、理想、正義、平安を求めると叫びが響いて居る。是等の叫びと言つたら、夫はく強烈なものだが、然し之に十分の満足を得るものは世界の何處にも存しない。

各種の叫び

世の中は何か常なる飛鳥川

昨日の淵は今日の瀬になる

實際世の中にあるとある物は、いづれも榮枯盛衰常なく、一つとして頼みとするに足りない。是に身を托するのは、譬へば暖簾に凭れるか、葦に身を寄せるかする様なものだ。吾人はもつと強力な、もつと堅實で、頑丈な或物に頼らなくては、何うしても安心が出来ない。是に於てか神の要求が必然的に起つて来る。

いかなれば、おのづからなる天地の

聲には人のうなづきはする

### (一) 感情の叫び

「人間は自然界に於ける極めて脆き葦、しかも思索する葦だ」とパスカルは言つた。然り、人間は思索する葦だ。我身の弱く、脆い、少しの風にも得堪へないことを飽まで承知してゐる。随つて強力な支柱と、頑丈な援助とを要求して止まない。

實際人間ほど弱い者は少からう。一寸した夜の闇にも怖れ、枯尾花にも膽を冷りとさせる。高山の

頂 そのすく／＼と雲表に聳ゆる峻しき峰を仰ぐとき、或は麓を廻れる河に臨み、その激して矢の如き早瀬となり、懸つて百丈の瀑布となり、湛へて底知れぬ淵となるのを打眺める時、或は茫茫と際涯もなき大海原を前にして岸上に突つ立つ時、誰しも一種の戦慄を禁じ得ないものがある。若しや、是等の大自然が忽然として怒を發し、縦横無盡に狂ひ出すと見るや、人はいよく己が力の虚弱いのに驚きの目を睜るのみである。篠つく人雨が幾日も幾夜も降り續いて、滔々たる濁流を漲らせ、堤防を決し、田畑を洗ひ、家屋を流し、人畜を溺らした時、一天俄にかき曇り、恐ろしい颯風となり、狂瀾怒濤は思ひのまゝに暴れ廻り、海には幾百の船舶を藻屑となし、陸には樹木を倒し、家屋を覆し、農作物を滅茶／＼にした時、其他、火事や、地震や、海嘯や、疫病やに出遭した時、茫然自失して爲す所を知らざるに至るのは言ふまでもなく、人間相互の間にしても、決して安心は出来ない。成るほど広い世界には、同情を寄せ、援助を惜しまぬ慈善家も居ないではないが、然し情といふは塵ほどもない、冷酷凶暴な悪漢、財を狙ふ盜賊、讒謗を逞うして止まない暴戾無道な人間が幾何ゐるであらうか。

若し夫れ戦争でも勃發して、敵軍の侵入を蒙り、家は焼かれ、財は奪はれ、父母妻子は離散し、正義は蹂躪され、人道は顧られず、訴へるに所なしと云ふ場合に遭すると、人は愈々我身の弱く力な

い事が恨めしくなつて来るものである。

斯る不幸に打突かり、災禍に見舞はれて、二進も三進も行けなくなつた時、何處へ行つて誰に縋らう？子供だと何か恐い物を見るか、痛い目に遭ふかすれば、直ぐ走つて母の袖に縋り付く。實に母の愛は温かい、その情は嬉しい、母ばかりは己を忘れ、勞苦を厭はず、身を抛つて吾子の爲に盡してくれるが、然したゞ夫だけに過ぎない。その病を醫し、その禍を遠ざけることも能はねば、死ぬ生命を繋ぎ止めることも出来るものではない。愛の權化とも謂ふべき母ですら十分頼るに足りないといふならば、況して赤の他人が當にされたものであらうか。世に慈善事業は多い、個人は勿論、政府も、地方自治團も、各種の博愛的施設を備へて罹災者の救済を謀つて居る。然し現世は依然「涙の谷」だ。その涙を残らず乾し、その窮乏を悉く賑はすと云ふは、到底望むべくして得べからざる所である。

然らば科學の力に縋らうか。今や科學は長足の進歩を遂げ、通信に、運輸に、工業に、醫術に、その他有ゆる方面に廣く應用されて居る。でも貧に苦しみ、不幸に泣き、病に死するものは増しこそすれ、少しも減じない。千九百十四年の世界戰、大正十二年の東京大震災が之を證して餘りあるではないか。

然らば何うすれば可いのだ。傲然肩を反らして飽くまで運命の惡戯に反抗を試みようか。或は又佛

者の宿命説に隠れ、何も前世の約束だと諦めて、一切をなるがまゝに放任しようか。千人に一人か、萬人に二人かは、さうした強がりも言へよう、諦めも付かう。然しそれが果して人情だらうか。寧ろ物の哀れを知り、不幸の叫びも聽き分け得る人間以上の何物かに縋らうとするこそ、當然すぎるほど當然ではあるまいか。「悲しい時の神頼み」と言ふ諺さへあるではないか。

天そゝる松が枝におく露の玉

風のらぎなば いかにかもせん

### (二) 理性の叫び

「我は果して何物ぞ。何處より來り、何處へ行くのだ？」、吾人は往々この叫びを魂の底に聞いて居る。我は果して何者ぞ、進化せし一個の動物か、生物とも無生物ともつかない様なモノネラが、次第に進歩發展して、今日の地位をかち得るに至つたもので、やがては死んで一撮の土に歸るべき筈のものか。或はまた全智全能の神より造られ、不死不滅の靈魂を備へて居る萬物の靈長であらうか。

我は果して何物ぞ？たとへ此問題が何等の利害關係をも有しないにせよ、なほ之を探つて見るのは決して無益な業ではない。先づ我身の何物たるかを究めるのは、正當な好奇心と云ふものだ。況んや

之より導き出される實踐的結論の極めて重大なる事を思はゞ、何うしても之を等閑に附し去る譯には行かない。さうだ、自分は果して進化せし一個の動物で、自分の生命は生れ落ちてから、墓に入るまでに全く盡果てるものとするならば、自分の爲に全生涯の方針は極めて簡單明瞭だ。今の中に出て来るだけ贅澤を盡し、あらん限りの愉快を漁り、面白く可笑しく世渡りをするに若くなしである。之に反して我身は不死不滅の靈魂を備へた萬物の靈長である、一生涯の善惡に就いて、死後それ／＼に賞罰される所がなければならぬものとするならば、話が全く違つて来る。贅澤を求め、快樂を漁り廻る代りに、正理の命するまゝに、規律正しき嚴肅な生活を送らねばならぬ。享樂的で、不檢束な生活と規律正しき嚴肅な生活と、兩者いづれを選むべきか……快樂を貪らんか、萬一不死不滅な靈魂があり、死後嚴重な賞罰を蒙る様なことでもあると、取返のつかぬ羽目に陥らぬとも限らない。然らば嚴肅な禁慾的生活を送らんか、若し何一つ墓の向ふに残る所がないものとするならば、それこそ「胃折損の草臥儲」と言ふものではあるまいか。

兎に角、現世の幸、不幸があり、來世の禍福もありさうに思はれてならぬ。何を何うしよう？、感はざるを得ない、誰か吾人に満足な解決を與へ得るであらうか。

玉ほこの眞の道はいづこぞと

心の問はゞいかゞ答へん

先づ科學者に問うて見ようか。複雑きはまる身體の構造、その微妙な諸機關、各機關の作用、その感すべき調和、統一等に就てならば、彼等もそれは／＼詳しく研究して居る。巧みに説明もしてくれ。然し其等が何によつて然るか、その靈妙なる生命、その驚くべき統一は果して何處より來たものであるか、肉體の外に靈魂なるものが存在するか、と突き込んで問うて見給へ。彼等は答へる所を知らない。彼等はたゞ目に見、耳に聴き、手に觸れる所だけを究研して居るのみである。

然らば哲學者の門を叩いて見ようか。一口に哲學者と言つても、その説く所は千差萬別である。「感覺に觸れる物質の外に、吾人は何等の實在をも認めない」と主張する唯物論者がある。物質以外に實在なし、精神作用の如きはつまり腦髓の分泌物、靈魂なんてあるものではない、と言ふのが彼等のお極り文句である。然しこの途轍もないお極り文句は、決して何處にでも通り、誰にでも承認されると云ふ譯のものではない。人は身體の外にも何物かを持つて居る。思索や、感情や、愛や意志や、是等精神上の作用が頭腦の所産たるに過ぎないとは、餘りにも沒條理な話である。何うして有形の頭腦に無形の作用が營めよう？、一部の學者は斯う非難して居る。然らばその所謂無形の精神作用は何處から生ずるのだ？別に靈魂なるものが存在するか、存在するにしても肉體と共に消え失せるので



はないか。果して不死不滅なのか、と問詰めて見ると、忽ちその答が明朗さを缺いて来る。吾人の認識力には限りがある。官能の範圍を超え能はぬ、より高く溯つて、その因つて来る源を極め、果して靈魂が存在するか、果して不死不滅であるか、といふことは到底確め能はぬのだ、と言つて居る。斯くて彼等は唯物論を排斥する一方から、不可知論に陥り、中途半端に踏み止つて動かないのである。斯幸ひ哲學者の中には、もつと眞面目な頭腦の持主も少くはない、彼等は曰つて居る。「吾人は現象界のみならず、また思索、感情、愛、意志の世界をも認める。是等は確乎たる事實だ、事實には必ずそれ相當の原因があらねばならぬ。膠髓が思索したり、筋肉が愛慕したり、神経が意志作用を營んだりすることの出来る筈がない。然らば思索し、愛慕し、意志作用を營む何物か、吾人の身内に存在しなければならぬ。その何物かを吾人は靈魂と呼ぶのだ。斯の如く道理を押し詰めて行けば、何うしても靈魂の存在を認めない譯には行かぬのである。

要するに科學者中には靈魂の存在を疑ふ者があり、全然否定する者もある。固より肯定論者も少くはない。彼等の斷定は頗る理屈に違ひ、傾聴に値するものゝ様に思はれる。然し吾人はもつと確な證據を握りたい、事は一生の禍福どころか、或は永遠の幸不幸に關しないとも限らない。然らばより確かな、より間違のない所を教示してくれる者が居ないだらうか。如何なる明智の人にも超えた明智の

方、永遠の光明、とも言ふべき方があつて、はつきりと吾人の運命の謎を解いてくれるならば、理性は如何に満足し、己が終局の目的に向つて、側目もふらずに邁進し得るであらうか、果してさうした永遠の光明、全智の神が居ないものだらうか。

道の奥、物の極みは目に見ゆる

限りなりせば何か嘆かん

### (三) 意志の叫び

「志す善は之を爲さずして、厭ふ悪は却つて之を爲す……あゝ我は不幸の人なる哉」(ローマ書)、と古の聖者は痛嘆して居る。それこそ古往今來人生の歎かざる嘆聲であらう。折角理想的生活の方針を定め、胸は高潔な思に躍らせ、崇高な望に燃立たしめたい。下賤な惡を卑め、不義を憎み、不正を厭ひ、親には孝、君には忠、神を愛し、人を恤み、以て惠を當代に施し、範を後世に遺したいと決心した。

然るに愈其決心を實行すると言ふ段になると、忽ち怪げな足が浮み出る、芳からぬ望が湧き起る。動もすれば肝を忘れる、義務を裏切る、非人情に流れる、反感を抱く、不義不正もやり兼ねまじ

くなる。

斯の如く、吾人の身内には絶えず暗闘が演ぜられる。崇高な憧憬の躍つて居る一方には、厭ふべき慾望が嘯いて居る、欣慕すべき理想が輝いて居ると共に、亦棄唾すべき暗い影も射して居る。而も兩者の争奪戦は一日や二日の事ではない。一生の久しきに亘り、夜でも晝でも間断なく行はれる。休戦もなく、猶豫もない。「あゝ我は不幸の人なる哉」。何うしたらばこの情慾を取押へ、この罪惡に打勝つて、平素の憧憬を満し、理想的生活を送ることが出来よう？我身を顧ると、餘りにも薄弱だ、是非とも有力な援助を必要とするが、さて何處に之を求めたものであらうか。

世人はよく言つて居る。「徳は徳の爲にこそ行ふべきものだ。親の爲、朋友の爲、君國の爲に盡すのは、人の人たる道である。この道を全うしてさへ行けば、心を汚したり、義務を裏切つたり、徳を敗つたりする憂はない筈だ」と。

なるほどそれは高遠な理想であらうが、然し未だ十分だとは申し難い。義務を果すには、それ相當な努力を要する。忠孝の道を全うし、國家の急に起き、厚生利民を之れ努めるには、我身の安逸を顧みず、我家の利害をさし措き、否、かけ換のない生命すらも抛たねばならぬことが往々あるものだ。幾ら高遠な理想ではあるにせよ、それこそ随分苦しい犠牲である。何故自分はそれほどの苦しい犠牲

を抛はなければならぬか。何故我身をさし措き、我家を抛つて、國家の爲、社會の爲に盡さねばならないか？

たとへ是ほどの犠牲を要求する權利が彼に在るとしても、我は何によつてその要求に應じ、我義務を全うし得よう？忠孝や、愛國や、博愛や、義侠や、なるほどそれは感すべき美德、高遠な理想たるに相違ない。然し美德だからとて、必ずしも私の薄弱な意志を強健ならしめ得るとは限らない。高遠な理想だからとて、私の怯懦を刺戟し、鞭撻し、叱咤して勇往邁進せしめ得ると極つて居る譯ではない。千萬人に優つた、智徳兼備の英雄豪傑ならば兎に角、一般民衆の爲には、徳とか、理想とか云ふ文字は餘りにも冷かだ。感情騒起、切齒扼腕せしめ得る何物をも有しない。然し人と生れた以上は、是非とも劣情を抑へ、各自の義務を全うし、正義、公正、忠孝、博愛の美德を實踐し、一世の儀表と仰がれる迄に至らなければならぬ。だが自分の足は如何にも弱く、險阻な徳の途を辿るのは餘りにも覺束ない、而も地上には一臂の力を貸してくれる者すら居ないので、何うせ天を仰ぎ、完全無缺な理想と輝き、その理想を追ふに要する援助をも與へ得る或者に縋るより外はない。果してその或者が天に見付かるだらうか。

枝折れて、月を覗くや峰の松

(四) 心の叫び

世に幸福を欲せざるものはない、貴賤貧富、男女老幼の別なく、人は皆口に幸福を叫び、胸は幸福を夢みて躍立つて居る。然し幸福とは果して何んなものであらうか。

幸福は富に外ならぬ、幸福ならんと欲せば、須く富を求めよ、と大抵の人は叫んで居る。なるほど富さへあらば錦も着られる、高樓にも住はれる、飲まうと歌はうと、旅行に、物見遊山に浮かれ廻らうと、萬事意の如くならざるなしだ。富なる哉、富なる哉！と彼等が頻に富を禮讃するのも無理からぬ話である。

だが退いて考へて見るが可い。幾ら美衣を着飾り、金殿玉樓に坐し、置酒高會、五官の慾を恣にした所で、人の心がそれに満足するだらうか。一體幸福と快樂とは似た様なもの、實は日を同うして語るべきものではない。幸福は永續性を有し、快樂はその場限りのものだ、幸福は腹の底まで浸み渡り、心を十分に満足せしめるが、快樂はたゞ一局部に限られる。目の快樂があり、耳の快樂があり、口腹の快樂がある。是等はその目なり、耳なり、口腹なりを一時樂ませぬでもないが、たゞ夫きり

で、心を満足せしめることは断じてない。請ふ福音書に出て居る放蕩兒の喩話を讀んで見よ。彼は父から譲られた財産を金になして、遠國へ飛出した。飲めや歌へと空騒ぎをやつて、その大金を瞬く間に使ひ潰ぶして了つた。

實に快樂ばかりは底知れぬ穴の如きものだ。之に投げ込んだものなら、財産でも、健康でも、優美な品性も、勝れた智能も、感すべき徳行も、一切沈み入つて了ふ。一つとして残る所はない。

彼の放蕩兒の成れの果を一見せよ、その大金を使ひ潰した時、常ならぬ饑饉が起つて來た。彼は糊口の途を求めんものと、土地の富豪に身を寄せて、その豚飼ひとなつた。豚の飼料たる豆穀なりと嘯つて饑に細つた腹を太めようとしたが、それすら思ひに託せなかつたではないか。今日でも、放蕩の結果、家を倒して路頭に迷ひ、健康を敗つて蒼白い、血の氣の失せた顔を、淋しい病院の窓際に覗かせるものが少くはないことを思へ。

酒の酔さむる頃には花は散り

然しそれはたゞ肉體上の不幸たるに過ぎない。悲むべきはむしろ精神の墮落である。もう罪から罪へと溺れ込み、忌々しき邪慾の豚飼ひにまでおちぶれ果て、世の物笑ひとなり、人に爪弾かれて居る。是ではならぬ、是非改まつて眞人間になりたいと思つても、多年の悪習はなか／＼以て改まらぬ。さ

らばとて、その汚はしき快樂でも、思ふ存分志にすることが出来るかと云ふに、それもなかく意の如くなるものではない。かう云ふ鹽梅で、快樂は決して眞の幸福とするには足りない。

然らば愛情は如何。世に愛情くらゐ楽しいものはない。愛の一語に曇つた額は晴れ渡る、沈んだ眼は輝き渡る、微笑は漾ふ、相好は崩れる、胸は速りに高鳴りして来るものだ。

然し愛も愛次第で、中には爛れた罪惡を伴ひ、汚い、撃墜すべきものさへ少くはない。爲に良心は怒鳴り出す、平和は失はれる。陰氣な、暗い、鉛の様な重苦しい空氣に胸は一杯となる。愛の甘きを味ふなんて全く思ひも寄らぬのである。

正當な夫婦間の愛にしても、なかく以て當てにされない。「結婚は敵の重圍に陥つた城の如く、外からは何とかして之に突入らんとし、内からは無理やりに之から飛び出さうとするものだ」と支那人は言つて居るとか。餘りにも悲觀し過ぎた嫌もあるが、亦一面の眞理を道破して居るではないか。實に結婚當座こそ夫婦の仲も至つて睦じく、長閑な、暖い、ボカ／＼した春の氣分を味ふことも出来る様なものゝ、何時しかそれが暴風雨の良となり、寒く、堪へ難い、骨を刺す様な氷の冬に早變りしないとも限らない。たとへ夫婦の間は平穩無事、少の波風すら立たないにせよ、舅、姑との折合ひ、子供の養育に案外胸を痛め、時には思はぬ疾病、不慮の災難に襲はれることすら無きにしも限ら

ない。

名譽や、地位や、權勢も、萬人の冀ふ所ではあるが、さりとして之を得るのは、非常に難く、得たにしても、心はなかく／＼それに満足し得ない。

思ふこと一つ叶へばまた二つ、

三つ四つ五つ六かしの世や

彼の佛帝ナポレオンを見よ、名もなき砲兵少尉から一軍の元帥となり、執政官となり、終には一天萬乗の君となり、向ふ所敵なく、全歐洲を蹴散して、列強の君臣を馬前に懾伏せしめた。身體は強健で、頭腦は明るく、文藝も語れば、政治も談じ、富貴、權勢、名譽、歡樂、一として意の如くならざるなしであつた。

然し勢極まれば即ち變ず、流石のナポレオンも餘り圖に乗り過ぎて、兵を弄び、露國に一敗して鼎の輕重を問はれ、ワテルローに再敗して英軍の虜となり、聖ヘレナの巖上に佗しい配所の月を眺めねばならぬ身の上となつた。何と言ふ皮肉であらうか。

月落ちてセントヘレナの浪高し

要するに人は皆幸福を欲する、夜も晝も寢ては夢み、起きては思ひ、始終忘れ得ないのは幸福の二

字である。然し快樂も、愛も、地位も權勢も、一向人を幸福ならしめない。然らば幸福は終に求め得べからざるか、その快樂や愛や位地や權勢の外に、我等を幸福ならしめ得るものが居ないのだらうか。

(五) 良心の叫び

人間の感情中で、最も高潔、敏感にして、且つ満足させ難いのは正義の觀念であらうか。人は皆正義を欲し、信賞必罰を冀ふ。忠臣正成が空しく湊川原の露と消え、却つて逆賊尊氏はまんまと天下を取り、子孫も長く富貴を擅にしたのを見ては、高山彦九郎ならずとも、悲憤の涙を禁じ能はぬのは人情である。徳は徳の爲に行へ、報酬を望んで徳を行つては、既に徳とするに足りない、と主張せるカント流の倫理學者でも、逆徒、姦賊、惡漢、毒婦が時を得顔にのさばり歩き、却つて忠臣、義士、節婦、孝子が貧困に苦み、暴虐に泣き、人に知られず、世に忘られるのを見ては、何時しか平生の主張を忘れ、覺えず切齒扼腕する、何故「積善の家に餘慶なく、積惡の家に餘殃ないのだ、あゝ天道は是非か」と痛嘆したくなつて來るものである。

實際世に正義の行はれんことを欲せざる人はない。内外如何なる行爲でも、隠れたるも顯なるも、一々認識され、制裁されて欲しい、男女老若、貴賤貧富の別なく善は必ず賞され、惡は必ず罰された

いものだと、人は皆冀つて居る。

而もその賞罰はしつくり功罪に釣合ひ、少の過不及もなく、善はその功に應ずるだけの賞を受け、惡はその罪に當るだけの罰を蒙つてこそ、始めて正義は満足するに至るものである。

然るに事實は果して如何なるほど多少の制裁は行はれて居る、自然的制裁があり、人爲的制裁もある。然し是等の制裁は果して如何なる價值を有するだらうか。

自然的制裁とは自然の成行から生ずる當然の結果で、善い樹は善い實を結び、蕪は羨しか生じない同じく惡は禍を招き、徳は福を來すのも當然のことであらう。

實際眞面目で、勤勉で、方正廉直な青年は、何時しかその眞價を認められ、その努力に報いらる。却つて遊蕩に耽り、詐欺を働き、不誠實、不勉強な男は、常にその賤いた種を刈らされ、容易ならぬ不幸に見舞はれるものだ。良妻賢母はよくその家を治めて、之を一種の樂園たらしめるが、輕佻淫奔な妻女は、必ず家庭を紊亂、崩壊せしめる。

勇敢、死を怖れざる兵士が、名譽の月桂冠を戴くの反して、怯將懦卒は、おめく〜と敵に背を見せ、人に爪弾され、世の物笑となるに極つて居る。

理屈から云へば、斯くあるべき筈だが、不幸にして事實は往々之を裏切つて居る。正直一遍な青

年、蟲も殺さぬ位に温順な婦女子、清廉にして不義を憎み不正を働かない商人、實業家等は、たゞ餘りにも正直であり、たゞ餘りにも小心翼翼と不善を戒めて居るが爲め、人に壓倒されて成功の坂を登り得ない。

却つて黠詐、老獪、物をごまかし、人を瞞り、盛に賄賂を使つたり、巧に泣付いたり、虚喝したりして、大成功を勝ち得、やんやと世に持囃されて居る者も少くはない。「天道に私なし」とは云ふものゝ、是ではちと怪しいものではなからうか。

其の道は此道なれど花達し

斯の如く自然的制裁は恃みとするに足りないが、それも不思議ではない。自然は盲目だ、その見る所は物質界のみで、道徳界には及ばない。體力に報い、奇才を賞することだけは知つて居るが、方正や、廉直や、謹慎や温順等に報いる所以を知らない。この缺陷を埋め、不足を補ふが爲に、人は干渉の手を伸して来た、自然的制裁に加へるに人為的制裁を以てするに至つた。

人為的制裁の中に先づ指を屈すべきは、社會制裁である、勸善懲惡と云ふ點から見て、社會は實に侮るべからざる制裁力を有する。

人は世の毀譽褒貶には頗る敏感である。一寸した善業でも、新聞雜誌に書き立てられると、忽ち有

而天になるが、嚴しい筆誅でも加へられた日には、急に肩身が狭くなつて來るのを感じるものだ。國家が綬章を作り、勳章を定めたのは、實にこの社會制裁の威力を發揮せんが爲で、國家は是を以て實業や、教育や、社會事業等の功勞に報い、實戰場裡に於ける武勳を賞する。一方悪人を取締るには、警察署を設け、憲兵駐在所を置き、を之法廷に引据え、刑務所に叩込み、それ〴〵に處分を加へて居る。

この社會制裁は、自然的制裁の缺陷を埋め合せるに頗る助とはなるが、何と言つても不十分である。外部に顯れる行爲を取締るのみで、内心に潜める善惡、邪正は措いて問はない。如何に高潔な志でも、唾棄すべき企圖でも、美譽も醜行も外面に顯れざる限りは、之を賞罰する所以を知らない。たとへ外面には顯れても、公然と表沙汰にならないか、或は人心を變動せしめる程の重大事件でない間は、格別世の注意を惹かない。随つて如何ほど恐るべき罪惡でも、秘密裡に斷行されたのは、そのまゝ暗から暗へと葬り去られる。同じく忠臣孝子の人知れぬ苦衷、慈母の献身的熱誠、貞婦の犠牲、凡卒の功勞等は多く人に知られない。

殊に社會はその名譽を與へるにつけて、頗る不公平である。財があり、地位があり、學識に秀で、家柄も舊く貴い人の言ふこと、爲すことならば、一寸した善言美行でも、口を極めてワイ／＼と讚め

立てるが、無位、無官、貧困、文盲の人ならば、随分感すべき善業を行つても、格別氣にも留めないものだ。

況んや社會の制裁や、法律上の賞罰などには、脅迫、賄賂、泣付き、拜み倒し等が利き易いもので、正直一天張りの善人で、思はぬ災難に苦しみ、無實の罪に泣く者があるかと思へば、強盗もやる、詐偽も働く、人殺さへ仕兼ねまじき罪漢が、富貴、榮華の中に一生を送ると云ふことも珍らしくはない。

然らば良心の聲はどうかと云ふに、成るほど良心は公平無私で、内心の悪でも外部の善でも、見落すことがない。而も善を賞し悪を罰するには、頗る大きな制裁力を握つて居る。善人の心に漲れる純な喜び、楽しい平和、悪人の胸を刺す不安、恐怖等を思ふと、良心の制裁だけでも十分に正義は全うされさうに見えないでもない。

立登る雲はおほへど晴れ曇る

空を行くなり月はやかに

然し一步立ち入つて考へて見給へ。良心の聲が鋭く響き、少の悪事までも厳しく咎立てゝくれるのは、随分デリケートな心の持主たる善人だけで、その怒號、叱責も悪人の耳には格別響かない。殊に

數々の罪惡を重ねた悪人になると、良心は全く眠つて了ふ。物を掠めようと、人を殺さうと、平氣の平左で高聲をかいて居ると云ふ鹽梅。

なほ惡事をなしつゝ生命を失ふ罪人や、義務の持場に踏み止つて、そのまゝ斃れる善人は、良心の制裁を蒙るだけの餘裕がない、全く賞罰なしにこの世を終る様な始末になるのである。

かくの如く自然的制裁にせよ、人為的制裁にせよ、良心の聲にせよ、何れも皆不十分である。全般的でもなければ、各の功罪にも釣りあはない、善にせよ、惡にせよ、その些細な點までも甄別、商量する明るさを持たない。たとへ明るさは持つて居るにしても、一善一惡の微に至るまで、それ／＼に賞罰を下すだけの方法も知らねば、能力も有しない。

斯くて強盜や、食人鬼や、賣國奴は巧みに法の網を潜り、どうかすると寧ろ大に富み、大に榮え、却つて節婦、孝子、忠臣義士はその美言善行に何等報いられる所もないかと思へば、誰しも飽き足らず思はずには居られない。

とにかく人は正義を欲する。善の公平に報いられ、惡の正當に罰せられるのを望む情は、已むに己まれぬ人の天性である。然しながら眼は極めて明るく、心は飽まで公平に、無限、絶對、全智、全能者でないならば、洋文通りに些の私もなき信賞必罰を斷行し、以て吾人の正義感を十分に満足せ

しめ得る筈がない、然らば斯る理想的有力者が、果して世に存在するだらうか。

永劫に在らん心の善悪を

報いん時のあらざらめやは

### (六) 社會の叫び

「孤獨なるは禍なる哉、倒るゝ時、之を扶け起すものなければなり」(一四二〇)、何時でも、何事に於ても、人は自給自足であり得ない。世の中に生きて行くには、どうしても直接間接に他の援助を俟たなければならぬ。

物質的生命を繋ぐには、家屋や、什器や、衣服や、食物やを要し、其等を製作し、供給し、修繕してくれる人が居なければならぬ。誰の御世話にもならず、獨立獨歩で生を営み、世を渡つて行くと云ふは、到底望むべくして得べからざる所である。

道徳的生命にしても同じく然うで、之に知識を授け、之が徳性を研いてくれる教師を要し、指導者をも缺くべからず、過去に在つても現在に於ても、全く一本立の人間、毫も人手を借りる必要のないものと云ふは、一人でもあることなしである。

然し獨立獨歩で世の中が渡れないと云ふこの状態は、何時でも愉快なものではない。時には随分辛い苦しい目も見せられる。之が爲め社會に隷屬し、重苦しい服従の責を拂はなければならぬ。故に自然はこの不都合に備へんが爲め、我等の心に一個の傾向、自ら人を慕ふの傾向を興へ、好んで兄弟と交はり、それを樂みとし、もし何かの必要を感じる時は、兄弟の許に駆けつけて應援を求めると云ふ傾向を興へてくれた。

この必要、この傾向が相合して人を社會的動物たらしめるのである。然し我等が欲しもし、必要とも感ずる社會は、完全に組織された社會、各員が相敬ひ、相恤み、相援けて行く理想的社會であらねばならぬことは言ふ迄もない所だ。さうなつてこそ我等はよくこの社會に生を樂み、陽氣に、快調に、面白く、可笑しく世を渡ることが出来る譯である。

之に反して社會が混亂して無政府状態に陥るか、惡漢、暴徒が時を得蘇に横行闊歩し、他を暴壓し、倒壊し、殘虐を擅にするに至らば、それこそ全く暗黒世界で、生を樂む餘地もなければ、陽氣に、快調に、面白く、可笑しく、世を渡る見込みもない。殷鑒遠からず、ソビエト・ロシヤ、若くは共産主義のメキシコに之を見る事が出来る。

要するに人は社會を成すが爲め、秩序整然たる社會に活きるが爲に生れたものである。今、社會が



秩序整然として人に幸福を樂ましめるには、正義と博愛とが洽く行はれなければならぬ。

正義の要求する所は、他人の權利を尊重するに在り、随つて各人の生命にも、名譽にも、財産にも、危害を加へず、彼等の自由、信念を傷けず、虚言、誹謗、讒誣を慎み、口論、詐欺、窃盜を戒め、各人は己が需要を充すに足るべきものを、社會に向つて平和的に求める様にしなければならぬ。一方、博愛は相互間の交際を温めて圓滑ならしめ、各人をして互に親切を盡して相信じ、相恤み相扶けしめる。可憐なものは之を救ひ、苦痛は之を共にし、不幸は之を慰め、誰に接するにも愛嬌たつぷりで、顔一杯に微笑を湛へ、何とも知れぬ快感を先方に抱かしめる必要があるのである。若し正義と博愛とが廣く世界に行はれたら、如何に理想的社會が築かれ、その社會の一員として之に住むのは、如何ばかり愉快に感ぜられることであらうか。

うつせみの人てふ人をあはれみ

袖なべて見る花ぞ花なる

不幸にして正義にせよ、博愛にせよ、自ら人の心に發生するものではない。なるほどその芽生だけは生れながらの傾向として、胸中に秘藏されてあるに相違ないが、然しその秘藏されてあるのはたゞ正義と博愛のみではなく、また随分利己的な傾向も萌えて居る。しかも雜草と同じく、その利己

的傾向の成長は領る旺盛で、油斷をすると、正義も博愛もそれに壓倒される、少くもその發展を妨げられる愛がある。

實に人間の利己的要求と來ては、それは一強大なもので、動もすると、他のすべての無私無慾な叫びを壓伏して之に沈黙を命ずる……場合によつては他人の利益を尊重するが爲に、自ら窮屈を堪へ、缺乏を忍び、時には一身を犠牲に供せんことをも正義は要求する。是等の要求に直面した時、自己愛は忽ち異義を申立てる。「何故人を我が身より先にせねばならぬか。なるほど、それによつて正義な人、博愛な人であるとは言はれよう。だが私自身の利益を其處に見出すならば兎もあれ、もしその爲に大した犠牲を拂はなければならぬと云ふならば、餘りにも馬鹿げて居ると云ふものではないか」と……たゞ自然的理窟を尋ね、自然の傾向のみに従ふならば、必ず然うした理論に到達すべきは智者を俟たずして知るべきである。

さればもし正義と博愛とが、各自の自由解説に従ひ、その好きすきによつて動くものとするならば、往々無視せられ、踏だくられるに至るべしと斷定しても、決して過言ではあるまい。然しさうなると、社會は壞滅に歸し去らない迄も、不安、憂慮、煩悶、苦惱に陥らないだらうか。

社會は右の譯柄をよく理解し、秩序整然たる社會が、人を幸福ならしめるに必要缺くべからざ

るものたることを確信し、且つは自己の存在を永く續けんがため、各個人の滅入り込まうとする善意を刺戟すべく努めて止まない。その爲に社會の利用して居る手段は、説教と強制との二つである。

先づ社會は學者の筆や口を以て、社會奉仕の利益を説き、各個人が社會より蒙る福利を思ひ出さしめる。身體のパン、精神の糧、進歩發展の武器、歡樂の手段等一つとして社會より來らざるはない、社會によつて是等の福利を蒙る以上、また社會にたいして各自の義務を果し、その社會より蒙るものを、また社會に返済せねばならぬ。返済の方法はと云へば、他人に害を加へず、彼等の精神、彼等の身體、彼等の所有財産を尊重することに外ならぬ。斯くするのは、つまり自分の福利を謀る所以で、他人に奉仕するのは、結局自分に奉仕するのだ。社會を隆盛ならしめると、眞先にその恩恵に浴するものは自分自身であるぞよ、と囁んで含める様にくりかへし／＼言ひ聞かして居る。

もしこの正義の義務を果すのを拒絶するならば、社會は之を強制することが出来る。充分に信服させ得ない時は力を用ひる。社會には不義を追求し、之を處罰する爲の機關が備つて居る。警官は犯罪人を搜索し、判檢事はそれを調査し、裁判して適當な處分を加へる。斯の如くして人の身體、財産、名譽に如何なる危害を加へても、そのまゝでは濟まない、侮蔑も、偷盜も、名譽毀損も、それ／＼に追求され、處罰される。

要するに、國家社會は正義を欲する。もし口に説いて行はせ得ないならば、力を以て之を強制する。正義は是非とも行はれねばならぬ。また必ず行はれる、さもなくば社會は倒壊を俟つの外はない。

我に出で我にぞかへる世のなかの事は  
ことごと福祉も禍殃ごととも

もしや博愛の方に呼びかけるが可いと見るならば、國家社會はそれをも利用することを知つて居る。その爲には各人の心に眠つて居る愛他心、人道主義を呼醒し得るのである。

人は互に如何なる綱を以て結ばれて居るか、他より物質的生命を受けるのみならず、また道徳的遺産をも受継ぐ、この生命、この道徳的遺産は自分の努力によりて之を増大し、以て子孫に傳へねばならぬ。幾本もの強い綱が各人を結び合はせる、各人はその長い／＼鎖の環の如くなり、一個の大きな家族を形造り、互に兄弟となり、姉妹となるのである。この事實をよく／＼自覺したらば、自づと同胞愛が生れ、すべての行動はその同胞愛に導かれ、自分のことのみを思はずして、亦兄弟の事をも思ひ、彼等の爲に一身を犠牲にして願みないに至るであらう。

博愛であるならば、社會は永くその名を祝し、當代人は競つて之を稱讚し、千載の下にまでもその

芳名を傳へるのだが、利己主義の人は、社會より無關心を、輕侮を、汚辱を浴せられるのみであらう。正義と博愛とを進め、社會の安寧秩序を保つが爲に用ふべき手段は、説教と強制とであるが、然しこの二つで充分であらうか。

大學の教壇に立つ先生は確信を以て之を講義し、學生は耳を澄して謹聽して居る。然しその呼掛は粒選の人々にこそ足りもしようが、主として社會を築き上げて居る大衆には、果して充分であらうか。強制、感情、連帶觀念、人道主義も大衆を信服させ、惡の巷へ走り込ませ、その足を引止めるに足るべしと思はれようか。彼等はよくその講義を理解してくれない。充分の怖れを抱くにも至らなう。

實際二十世紀に入つてから、盛にこの種の道德は叫ばれて居るが、然し今日ほど社會道德の墮落を歎き、その危機を訴へる聲の聞えることはない。罪惡は滔々として天下に奔流し、社會鬭争は日を追つて激甚を加へるのみである。

是を以て之を観ると、いくら口を酸くして社會道德を説いて見た所で、そればかりでは足りない。社會の加へる賞罰も、人權を尊重させ、正義に王座を占めさせるには不十分だ。その呼聲さんとする確信も、博愛の火を焚きつけ、同胞愛を燃え立たせるには餘りにも微弱である。つまり社會道德なる

ものは、獨力で、無政府状態を防ぎ、社會の安寧秩序を維持作興することが出来るものではない。然し人間は飽くまで社會的動物で、社會を離れては生きて行けない。たゞ社會の御蔭によつてこそ物質的にも道德的にも人間らしい人間となることが出来る。故に社會は必要である、しかも秩序整然たる社會が必要である。

もし社會の幸福を發生、保存、増大せしめるに、人間の力のみでは不十分だとせば、人間以上の何者かに絶つて之を求めなければならぬ。我等が愛慕し、尊重すべき權威が斯土に見付からないとせば、少くも斯土以外、謂ゆる天國に之を捜すより外はないではないか。

結 論

要するに吾人の感情、理性、意志、心、良心、社會等は均しく、人間以上に、現世以外に何物かを要求して止まない。この聲は多數相合して一個の強大無比の叫びとなつて居る。世事に没頭し、俗務に追はれて、一時その叫びに注意しないことはあり得るが、之を全然閉息せしめる事は到底できるものではない。この叫びばかりは、夜でも晝でも絶えず響いて来る。而も痛切である。號令的である。機會ある毎に、少しく心が落ちついて来る毎に、忽ち人の耳を打つ。あゝこの叫び！是こそ神秘的な

結 論

己むに己まれぬ、神を要求する聲ではないだらうか。すると神は必ず存在しなければならぬ。神の存在を抜きにしては、人間の要求は決して満たされない。吾人は何うせ不完全な未成品たるを免れない。然らば神は果して存在するか、單に一個の漠然たる理想たるに止るのではないか？

月も日もとほにくもらずとはに照る

み空を仰げ人のもろく



## 第二部 神は存在する

緒 言

吾人は既に人間の叫びを聴いた、神を要求する人間の極めて痛切な、己むに己まれぬその叫びを耳にした。然らば神は果して存在するだらうか。今之を(1)宇宙の存在、(2)その運動、(3)その秩序、(4)道徳法、(5)人心のあこがれ、(6)各民族の信念等に訴へて見よ、誰か敢て神の存在を否定し得るだらうか。

### (一) 宇宙の存在から推して神の存在を證す

(其 一)

神は存在する

空も突抜ける様に美しく晴れ渡つた秋の日、高山の頂に登つて見給へ。峨々たる山岳、奥まつた溪谷、白い帯の如き河川、見渡しもつかない大海原、都市村落、田圃、林野、其等を遠く打眺めると吾地球も随分廣大きなものだな、と驚かすには居られない。なほ双眸に集め得る範圍内に生息せる動植物を數へて見よ。路傍の名もなき雜草から、すく〜と天を摩する巨樹大木まで、叢にすだく昆

蟲から、高山深林を我物顔に徘徊せる野獸までも残らず數へ上げ、之に空の鳥、海の魚、家畜、人間を加へたら、それはそれは幾億萬の多きに上るであらうか。

然し高山の上から打眺めた範圍、双眸に集め得た區域は其實狭い、小つぼけなもので、吾地球の大きさと來ては、之に幾千萬倍を加へ、いくら想像を逞うしても、容易にその實際大に達し得ない程である。然り、吾地球は赤道の周圍に於て一萬二百里餘、一時間に四十里から飛ぶと云ふ飛行機に乗つて、之を一周するにしても、なほ十日餘を費さなければならぬ。

斯の如く我地球は一見非常に大きなものゝ様であるが、然し實は太陽に附屬せる惑星中でも、むしろ矮小な方で、木星などになると、地球の千三百倍に上つて居る。否、諸惑星を悉く一に集めても太陽に比べたら物の數でもない。我地球を百三十萬から合せなくては、太陽ほどの大きさには達し得ないのである。

この大きな太陽、その周圍を運行せる諸惑星、其等を一つに引括めた所謂太陽系の廣大さは、想像にも餘る位であるが、然しこの廣大驚くべき太陽系も之を天空にチラ／＼と瞬きして居る星の中に据ゐると、實は小な一點たるに過ぎない。蒼空に銀の砂でも撒きちらしたかの様に輝ける星は皆我太陽の如きもので、而もその數は驚くに餘あり、肉眼に見えるのだけでも八千五百に上つて居る。若夫れ

現代式の最大望遠鏡の筒先をさし向けるならば、大凡一億萬を算すべく、寫眞の乾板に撮つて見るならば、十億にも上るとか。三十億に達すると云ふ天文學者すら無いではない。その直径や體積に至つては、なるほど多くは吾太陽よりは矮小であるが、中には圖抜けて巨大なものも少くはない。例へば大犬座のシリウスは太陽の十六倍、駁者座のカペラは五千八百倍、牛飼座のアルクツルスは直径二十倍、體積八千倍、オリオン座のベテルギウスは直径三百倍、體積二千七百萬倍、蝸座のアンタレスになると、直径が四百八十七倍、體積は一億一千三百萬倍に達して居る。

距離も亦非常なもので、地球と太陽との距離は、大凡三千八百萬里、之に達するには一時間、十四餘里、一晝夜に三百四十里も行く汽車に飛び乗つて、夜晝走りづくめに走つても、なほ三百年餘を要する。一秒間に三百三十メートルの速力を有する音響でさへ、太陽から地球に達するには、三十四年半を費さなければならぬ。

太陽の距離ですら斯の通りだ。況んや恒星の距離に至つては、たゞもう目を圓くして驚き入るの外はない。ケンタウルス座のアルファは、恒星中最も吾地球に近いのだが、それにしても地球太陽間の距離の二千八百萬倍に達して居るといふ。斯くの如く恒星と地球との距離は驚くべき數字に上り、なか／＼以て一口に言ひ難いので、天文學者は光線が一年間に通過する里程を單位として計算し、之を

一光年と呼んで居る。今光線は一秒間に大凡三十萬 光 (七萬八千里) の速力を有するのだから、之が一年間に通過する距離と云つたら、それこそ想像にも餘るほどである。試みに一日二十四時間を秒に引直すと、八六四〇〇秒、一ケ年は三一五三六〇〇秒となる。之に光線の一秒間の速力三〇〇、〇〇〇を乗すれば、四六、〇〇〇、〇〇〇、〇〇〇 光年となる譯だ。

今この光線が諸恒星から吾地球に達するまで、幾光年を要するだらうか。  
ケンタウルス座のアルファは四、三光年、シリウスは八、五八光年、北極星は四六、五五光年、アンドロメダ座のアルファは五四、三〇光年と云ふ様になつて居る。天文學者中には三六萬光年を算する星さへあると主張する人があり、是等の星の光は一秒に三十萬キロメートルの速度を以て飛行しながらも、なほ三十六萬年後にならねば我等の眼には達しない譯である。

宇宙は斯くまで大きく廣く殆んど數へも測りもされない位であるが、さて是等は何處からどうして發生したものであらうか。多くの天文學者の唱道する所によると。

「吾が銀河系と呼ばれる大きな天體は、最初形も何もない大ガス團から出發して、漸次一個の渦形星雲に變じ、それが更に變化を重ねて個々の恒星を生むに至つたものらしい」といふのである。然らばその所謂大ガス團の起原は如何、如何なる物でも原因なしに發生するもので

はない。一軒の家、一個の時計にせよ、未だ曾て偶然に出來た例がない。必ず之を作つた大工、之を組立てた時計師が居なければならぬ。況んや宇宙の如く廣大にして數へも測りも出來ない程のものがたとへ最初はどんな稀薄な、形も何もないガス團をなして居たにせよ、何等の原因もなしに、偶然獨手に飛出し得る筈があらうか。

天に咲く星の花數誰かぞふ

(其 二)

我地球には、草木、禽獸、人間と云ふ様に無数の生物が見受けられる。して生物は何れも種子なり親なりから發生する。樅樹は樅實から萌え、小犬は親犬から生れる。然しその樅實、その親犬は果して何處から來たものだらうか？、固より樅實は樅樹から、親犬は更にその親犬から來たに相違ない。それよりして今日の生物と昨日の生物との間に、親子の關係を認め、その關係を地質時代にまで押進めて、現存の生物、及びその變種は始生代に見られし生物の進化したものに外ならぬと主張する向が多い。世の所謂「進化論」なるものがそれで、我等はそれに就て彼此と議論を闘はず考は持たぬ、可しとして置かう。

然しその最初の生物、謂ふ所の「モネラ」は何うして地上に顯れ出たのだらうか、と尋ねて見ると論者の答は極つてゐる。「それは都合よき環境に恵まれて、自ら海中に發生したのだ」と。これこそ種の生えた生物自生論で、既に佛のバートル、英のチンダル等から完膚なきまでに打破されたものであるが、然しそれも可しとして置かう。尋ねたいのは、その海底の都合よき環境だ。それは如何にして發生したものであらうか。

その環境も地球進化の結果に出でたものである。最初地球は白熱に輝いて居たのであるが、時を経て隨ひ、空際の寒氣に觸れて次第に冷却し、表面に地殻を生じ、それから水蒸氣は凝集し、低窪部に集つて海をなし、大氣はいよく清淨化し、生命の發生に都合よくなつた時、先づ海底に原始的生命の發生を見たのである。

すると、この地球それ自體は何處から來たものであらうか。

それは太陽や星の如く、最初の星雲團から分離したものだ。初めすべての物質の熔解、混和した形も何もない、非常に大きなガスの塊、即ち大星雲團が驚くべき速度を以て自轉しつゝあつた。その急速な自轉の結果、外側に在りし分子は次第に母體を離れて空際に投げ出され、今日見るが如き無数の星辰を形造るに至つたのである。

然らばその所謂最初の星雲團は何處から生じたものであらうか。多分無限の空際に彌漫せるエーテル分子が、上下左右よりその中心點を目指して投合し、以て星雲團を生じ、非常な強熱を起さしめるに至つたものであらう。然らばそのエーテル、宇宙の母體とも謂ふべきその最初の物質は、一體何處から來たものであらうか。

斯う問ひ詰められると、流石の論者も答辭に窮し、「物質は永遠だ、無始無終なのだ」と逃げるに極つて居る。然し間違つてはいけない。時の問題と原因のそれとは決して混同すべきものではない。物質が何時發生したか、或は永遠にして始まる所ないのか、それを我等は問題としない。我等が伺ひたいのは、如何にして物質が世に顯れ出たか、自生自存の結果であるか、或は何物かに造られたものであるかと云ふ一點である。宇宙が永遠より存在するとしても、始めがあるとしても、如何にして發生したか、その原因は何であるか、と云ふ問題は依然として残り、解決を促して止まない。

なるほど頭腦で考へ廻す時は、さうした問題も起らう。最初の物質が原因なしに出たらうとは思ひ得まい。然し實際上からそれを問題とし、最初の物質が原因なくして顯れたことなし、と斷じ得るだらうか。……論者は斯う言つて其場を誤魔化さうとする。でも頭腦の要求する所は、また事實の要求

する所ではあるまいか。物が原因なしに發生することは、諒解されないとせば、また事實上原因なしには結果もないはずである。經驗もまたこの信念を裏づけて居る。橙果より生ぜざる橙樹あり、泉なくして流れる溪川あり、如何なる筆も之を操る人がないのに、文字を書くことあるべし、とは思はれない。實際筆は手によらずしては文字を書かず、溪川の水は泉なくしては流れず、橙實も橙樹なくしては生じない。されば原因なくば結果もまた無いことは、理論が之を斷言し、經驗も之を立證するのである。

是に由つて之を觀ると、最初の物質と雖も、原因なくしては決して發生しなかつたことは明白である。然らばその原因は果して如何なるものであらうか。物質の原因は物質それ自體とするか、他に原因があるとするか、二者其一を出でない。物質が自己にその原因を有するとせば、それこそ獨手に發生したのである。他に原因を有するとせば、他から造り出されたのである。

前者は矛盾して居る。どうしても承認されない。最初の物質が自己に存在の理由を有し、自ら己に存在を與へ得たとするならば、その物質は完全無缺にして、全能力を有するものとせねばならぬ。然し物質は決して完全無缺ではない。最初は形も何もないガス團、夫れが幾億萬年の歲月を経過して、次第に今日の狀態を呈するに至つたもので、頗る不完全なものとなせねばならぬ。故に物質は決して完

全無缺なものではなく、自ら己に存在を與へ得るものでもない。さすれば最初の物質は必ずその存在の原因を他に有せねばならぬ。その原因たるや、全能にして自ら存し、他にも存在を與へ得るほどのもので、我等は之を神と稱する。故に神はどうしても存在せざるを得ない。

かくばかりふとき遙けき天の世は  
誰つくりけん神ならずして

### (二) 運動を以て神の存在を證す

(其 一)

宇宙の諸物體はたゞ廣大にしてその數を知らないのみならず、また實に非常な速度で以て運動して居る。その運動には力學的に行はれるのがあり、生活現象として見られるのがある。

(1) 試に橙の實を取りて、之を地に蒔いて置き給へ。適當な熱と濕とが加はると、實は何時しか外殼を破り、その小さな根を地中に打込むと共に、亦青い芽を天に向つて伸ばし、根を以て液汁を探り葉を以て大氣中の炭素を吸収し、兩者を合せて澱粉を作り、その澱粉を養分として成長する。この同化作用と發育作用は絶えず行はれ、時々刻々止みなしに繼續する。尤も陽春の候に於ける作用は特に旺



盛であるが、さらばとて如何なる季節にも停止する様なことは断じてない。冬季等には枯死した様な観を呈して居るにせよ、實は其間に若芽と花實とを準備して、一陽來復を俟つて居る迄のことである。この絶えず緊張せるエネルギーによりて、植物は成長し、花を着け、實を結び、以て種族を何時までも絶やさないのである。

斯の如く植物は晝夜を分たず、春夏秋冬を問はず、不思議な活力を作用させて居る。今地球上の植物、路傍の小さな草より、林中の亭々たる大木に至るまで、悉く之を數へ、この數を以て各植物内に生動せるその活力を乗じたら、植物界に躍動せる活力の數たるや、驚嘆に餘ある程ではないだらうか。

然し動物界に生動せる活力はより以上に驚くべきである。最初の卵の細胞は、その神秘的エネルギーにより、何時しか分裂して二個の細胞となり、その二個の細胞が更に分裂して四個となり、八個となり、十六個となると云ふ様に増殖して、こゝに胎兒が出來、小さな動物が生れる。しかもこの小さな動物は身を擁護するが爲め、生命を保存するが爲め、營養を求め、成長するが爲め、絶えず活動する呼吸作用、循環作用、同化作用を間斷なく行ふ。夜でも、晝でも、休息して居らうと、活動して居らうと、一瞬間でも、この生活作用を停止することがない。一たび停止せんか、忽ち死滅するのみだ。

兎に角、運動が續行されて、動物は發育し、成長し、親となり、兒を生み、子孫を遺すに至るのである。

要するに生命はエネルギーの不斷の發展である。この活力は、地上に、地下に、水中、空際に存する生命の數だけ繰返される。その數は限りなく、その力は驚くべく、想像も何も及ぶ所ではないのである。

(2) 斯の如く、草木禽獸に見られる生活運動は、驚嘆に値するが、然し全宇宙を動かして居る力學的エネルギーに比べたら、それは實に小つげなものである。

我地球が見かけに反して運動して居ることは、人の皆知る所である。先づ地球は二十四時間に一回轉する。赤道の一點に於ては、一日に大凡一萬二百里の速度を以て自轉する譯である。然し地球は自轉するばかりではない、また公轉する。自分の軸の周圍を回ると共に、また太陽の周圍を運轉して居る。その速度は地球自轉の六十四倍で、一日に六十五萬一千三百里餘を走り、三百六十五日と四分の三を以て太陽の周圍を一回轉する。一たび回轉し終ると、復同じ速度を以て同じ軌道を走ると云ふ様に、幾億萬年の昔から、その運動をくりかへして居るのである。

然し運動して居るのは我地球ばかりではない。他の惑星も同じく自轉すると共にまた公轉して居る

自家の軸を中心として回轉すると共に、また太陽の周囲を運行して居る。

今惑星界の中心たる太陽は如何。昔の人は太陽を以て不變不動なりと信じて居たものであるが、太陽面上に出沒する黒點を、詳細に觀察せし結果、是が二十五日と四時間に一自轉をくりかへしてゐるものと知られ、なほ最近の觀測に由ると、太陽は自轉すると共に、また諸惑星を率ゐて、琴座の一角をめぐらして、一日に大凡百五十萬里の速度を以て飛行して居ることが明になつた。

太陽系に見られる運動現象は、他の星系にも同じく行はれ、何れの星も公轉と自轉とをくりかへして居るのである。無際限の天空には巨大驚くべき無数の天體が、非常な速度を以て縦に横に上に下に飛行して居る。人間の想像などは、一見して驚きの餘りに立慄んで了ふ位。この諸天體の縦横無盡の運動を頭に描き出さうとする時、己が想像力の短小無能なるに誰か長大息を禁じ得るだらうか。諸天體の數、その巨體、その運動、その速度の強大さに魂けて、全く爲す所を知らず、驚嘆の餘りに、この運動、このエネルギーは果して何處から出たものであるだらうかと、自問せずには居られなくなるはずである。

萌え出る草葉の呼吸や何處より

(其 二)

宇宙は運動して居る。その生物たると無生物たるとを問はず、皆運動して居るが、この運動は果して何處から起つたものであらうか。先づ生活運動に就て言ふと、それがより先の生活運動より出るとは申す迄もあるまい。櫻の樹のエネルギーは櫻の實のエネルギーより出で、人の子のエネルギーは父のエネルギーより、父のエネルギーは又その父のエネルギーより出る。斯くて子より父へ、父より又その父へと溯り、地質時代に入り、終に第一の生活エネルギーに到達することが出来る。

然しその所謂「第一の生活エネルギー」は孰より生じたものであらうか。論者はよく曰つて居る。「それこそ器械的エネルギーの進化したものに外ならぬ。生命はつまり運動の總和である。この運動は極めて複雑であり、その分析も非常に困難であるにせよ、兎に角一個の運動に過ぎない……故に器械的エネルギーと生活エネルギーとの間には、連繋があると見るが至當であらう」と。

斯る斷定は到底そのまゝ承認する譯には行かない。生命が運動となつて表はれるにしても、それが悉く運動となる譯ではない。經驗に由つて見ても明で、生命はまた實に秩序でもある。秩序としては、その生命を實現せしめる運動の外に、之を秩序づける一個の精力、一個の生活本原を推定しなければならぬ。論者は之を無視せる結果、生命を説明する資格がない。こゝに取押へて、そのまま動か

さないことも出来るが、今度までは見逃して脱出せしめ、最後の土壇場に迫詰めるのも一興ありであるから、論者の言ふが如く、生命はエネルギーの進化したもの、つまり器械的運動から出たものであるとして置かう。

然し運動その物は、生物の中に見られる運動のみならず、我地球に、諸惑星の親玉たる太陽に、大小無数の星辰に見られる運動に至るまで、運動と云ふ運動は、果して何處から来たものであらうか。それは最初の星雲の運動が其まゝ、継続したのだ、星雲は恐ろしい速度で以て自轉して居たもので、その自轉の結果、強大なる遠心力に投出された星雲の断片が、元の運動をつゞけてそれゝゝに自轉をなし、各種の星辰を形造り、この星辰はまた最初の運動を保つて軸の周圍に自轉すると共に、一個の中心勢力をめぐつて公轉をくりかへすことになつて来たのである。

然し星雲の運動はつまるところ何處から来たものであらうか—それは星雲の形造られる際に起つた自然の現象である。即ち星雲の分子は最初無際限の空間に瀰漫して居たものであるが、時至つてその分子が中心核に向つて落下し始めた。上からも下からも右からも左からも落下して来たので、一塊の球を形成するが爲には、自づと自轉せざるを得なかつた。而もその分子が遠距離より來り、落下の勢が強大であるだけ、その自轉速度もまた非常に強大となつたのである。

だが其分子の落下を呼び、星雲の形成や運動を起した原因は何であるか—それは萬有引力に外ならぬ。星雲が萬有引力によつて形成されたとは、果して何を意味するのであるか。時至つて瀰漫せる分子が、中心核に落下して自轉を始め、球體を形成せしめたと云ふに止るか、それならば單なる事實を肯定したのみで、その因つて來る原因は之を説いて居ないではないか。或は一定の時期に引力が顯はれて、飛散せる分子を一團となしたと云ひたいのであるか。果して然らざれば、なほ一步進んでその引力の原因を問ひたくなる。だん／＼簡單にはなつて來るが、然し問題は依然として残る。否、一層切迫して來る。その第一のエネルギー、他のエネルギーの流れ出る源泉たる第一のエネルギーは果して何處から來たのであらうか。

斯う問ひ詰められると、論者は一寸遁れに「宇宙は永遠である。何處から出たものでもないのだ」と答へるに相違ない。だがこの遁辭は單に混亂を招くのみで説明にはならない。永遠と云ふのは、たゞ運動の始まつた時期に當ること、我等が關心を持つのは、運動の現れ出た時期ではなくて、その原因である。たとへ宇宙を以て永遠なりと認めるにせよ、問題は少しも變らない。永遠の運動、その運動の原因は果して何であるか。

この驚くべき運動、萬物を生動せしめ、すべての世界を支持する運動、その持續、その廣大、その

強烈さは以て人智を驚倒せしむるに餘りあるその運動は、果して何に原因したものであらうか。それは確に物質からではない、物質は自己に存在の理由を有せず、己より存在すること出来ないが如く、また自ら己を運動せしめることも出来ない。然らば宇宙間の運動はより上級の原因、全能なる原因より來らざるべからず。この原因を我等は神と稱する。故に神は存在せざるを得ない。

物體や變化運動花の咲く

### (三) 秩序を以て神の存在を證す

#### (其 一)

宇宙は單に物體と運動とが雜然と集合して居るのではなく、是等の諸物體と諸運動とは皆よく諧調を持し、整然たる秩序を保つて居るのである。

秩序とは、全體を構成せる諸要素の集合、多數が一に歸着せる珍らしい體様を謂ふ。

宇宙に秩序ありとは、つまり宇宙を構成する諸要素が互によく諧調を保ち、整然たる一個の體系をなすに至つてゐるの謂に外ならぬ。

實に自然界を観察すると、到る處にさうした一絲亂れぬ秩序を見ることが出来る。先づ礦物界を一

瞥せよ、各物體は分子の集合より成り、分子は二個或はそれ以上の原子より成つて居る。長くの間原子は之を分解し得られぬものと思はれたが、最近に至つて科學は之を分析して、その珍らしい構造を發見することが出来た。極めて小さな、幾個もの陰電子が、一個の陽電子を中心として配列され、光の速度の三分の一と言ふ驚くべき速度を以てその周圍を回轉して居ることが知られた。それこそ太陽系を極度に縮少した様なもので、要するに多數の原素、及び運動が見事な諧調を保ち、劃一的に配列されたのを原子と言ふのである。

物體の最初の構成要素に見られる秩序は斯の如きもので、この秩序が同じく宇宙の構造にも見られるのである。

實際、原子はその質量と運動とをそれ／＼に組合せて、分子を形造り、分子はまた多數相集りて我等の眼に映する物體を成すに至るのである。さすれば物體なるものは、より簡單な多くの要素と活動とより構成されて居るのだが、たゞその多數はよく統一されて居るまでのことで、こゝに諧調の法則整然たる秩序を見るのである。

神の如く礦物界には、その要素にも、その要素の集團にも感すべき秩序を見るのであるが、然し植物界に存する秩序は一層鮮かである。

自然科学は植物の組成されて居る要素の複雑性を物語つて居る。植物體に見られる最も簡單なものは細胞である。細胞の構造は原子の夫からすると遂に珍らしい、細胞はその混合の如何によつて互に相異なる種々の組織をなし、組織が相集つて植物體を成すのである。要するに植物體には、複雑な活動力がその勢威を振つて居るのだが、それは先づ各細胞内に之を見るのである。細胞はその活動力によつて發達、分裂し、補足される。次に各細胞の活動力が相合し、相配列して各種の作用を営み以て植物の成長、繁殖を確保する、根より養液を吸ひ、葉を以て呼吸し、その養分を消化し、運搬し同化し、排泄する、それこそ何から何まで調和のよく行き届ける活動力が間斷なく行はれて居る譯なのである。

斯の如く植物は多くの要素と活動力との調和より生きて居るので、もしこの調和が破れた日には死滅を俟つより外はない。兎に角、植物はこの内在せる調和、即ち秩序によつて生活して居る次第である。

動物とても同じく然うだ。動物が細胞及び生活力によつて組成されて居ることは人の皆知る所である。その生きた事實を突き留めるが爲に、人はその機關、例へば目を描寫して見せることにして居るその目を組成せる要素の數々を指さし、その活動の巧妙にして、複雑なる機關がよく調和を保てるの

を見ては、誰しも驚嘆せずには居られない。その上、動物體はさうした複雑な機關が幾個となく相聯結して組成され、それにはまた非常にデリケートな活動力が備はり、しかもそれ等の機關や作用やは決して相分散し、相戦つて居ないのみか、よく實に整頓し、諧調して以て動物體を構成・維持して居るのである。

若し夫れ人體の組織内に見られる秩序に至つては、たゞもう感嘆するの外なしである。さて秩序は各個體に見られるのみならず、また界と界との間にも之を見るのである。即ち眞先に顯れた礦物界は植物界に、兩者は動物界に生存の必要物を供給し、人間は右三界を採りて自己の生命を繋ぎ精神上の進歩發展の資となすのである。

是を以て之を観ると、地上には整然たる秩序が嚴存して居る、それはまた當然のことで、我地球も太陽系の一部をなし、諸惑星及び太陽にたいして一定の地位を保ち、公轉と自轉、他の諸天體の種々雑多な運行と巧に組合された公轉と自轉とを律規正しくくりかへし、互に衝突を避けると共にまた光線、溫度、その他、地上生物の保存發育に必要な條件を供給されて居るのである。

太陽系は、天空に散布、運行して居る大小幾億萬の星辰と互に引力を及ぼし、相引き、相引かれつつあるので、今の如き整然たる秩序を保つには、其等無數の星辰、その質量、距離、運動の方向等

を悉く考慮に入れて、整頓、排列しなければならぬ。試みに思へ、太陽の幾千幾萬倍も大きな星が無限の太空をば驚くべき速度を以て飛行しながら、幾億年の昔から遅速を見せるのでもなく、軌道を踏み外すのでもなく、相衝突するのでもなく、整然として回轉を續けてゐるのである。この宇宙と云ふ大時計の正確さ、その速力、その進行、その持續を沈思、默想したらば、誰しも一絲亂れぬその整然たる秩序に驚きの目を睜り、この秩序がなかつたら、宇宙は到底一日も存續し得べからざることを認めるに吝ならぬであらう。

花咲くや天地の整美こぼれいで

(其 三)

宇宙間に見られる秩序、整然として一絲亂れざる秩序は、果して何に原因するのであるか。秩序は偶然の結果で、原因などあるべきはずがない。最初物質分子が空間を運動してゐる際、偶然他の分子に行遇つて、之と結合し、その他の分子が次から次へと之に加はり、斯くて種々の物體を生じ、其特性を發揮し、それから進んで植物となり、動物となり、進化に進化を重ねて、終に今日の如き宇宙の森羅萬象を見るに至つたのだ、物質と運動、この二つは、以つて宇宙の生成、その諸現象を

説明するに澤山だ、原因など、さうした小六ヶしいものを擔ぎ出す必要は斷じてない。論者は斯う云つて、簡単に問題を片付けてしまはうとするが、然し「偶然」の二字を以てこの大問題の解説が出来たら、それこそ芽出度い限りである。何れにせよ堂々たる學者の中にすら「偶然」の崇拜者を以て自ら許して居る人が見受けられる。固よりそれは正しい解説を與へる爲と言はんよりは、むしろ秩序の原因たる神を擔ぎ出されない爲、豫防線を張つたものと思はれるので、我等は以下その取るにも足らぬ妄説たることを證明したいと思ふ。

偶然に原子を説明することが出来ない、原子は陽電子の周圍を幾個かの陰電子が、非常な速度で以て回轉しつゝあるのだと言ふことは、既に一言して置いた所である。この陽電子と陰電子とが組合つて酸素なり、塩素なり、ナトリウムなり、その他の原子となるのであるが、その組合せ方に就て、一寸考へて貰ひたい。僅か十二個の球を以ても、四億七千九百萬二千六百と云ふほど異つた組合せ方をすることが出来ると云ふことだ。して見ると、原子を構成する爲の陽電子と陰電子との組合せ方は、幾十百億をも數へる事が出来、その組合せ方の中から、唯一つだけが、よく均衡と諧調とを實現して原子を構成し得るのである。他の組合せ方を以てしては必ず混亂が起り、均衡は破れ、原子そのものの生成は望むべくして得べからざる所で、確乎として動かさざる形態は、即ち實現せられたそれのみであ

る。それが盲目的運動の結果、偶然にさうなつたものと思はれ得るだらうか。  
もし夫れ原子より細胞、細胞より組織、組織より器官へと上つて行くならば、困難はいよ／＼倍加する。目を例に取るならば、各組織を構成する細胞は驚くべき數字に上り、その活動もまた非常に複雑である。随つて之に秩序を立て、之を整頓するが爲には、厳正なる均衡を必要とする。少しでも喰ひ違ふと、忽ち混亂を來し、毀損して、目の用を爲さない。例へば網膜の細胞がたゞ一個でも虹彩中に紛れ込んだとか、或は水晶体の筋肉が視神経に作用するとか云ふ様にでもなると、早や其目は健全ではなく、視覚は無くなつて物を見ることが出来ない。細胞と活動力との組合は唯一つのみが、器官とその作用とを有効ならしめるのである。然るに細胞と活動力との組合は幾億、幾兆の多きに達することが出来、その中のたゞ一つだけが、健全なる働をなし得ると云ふのに、それが果して偶然の結果に出づると言ひ得るだらうか。

たとへ原子や、器官の生成をば、偶然を以て説明し得るとしても、問題は少も解決されない。体内には無数の細胞があり、生物にはまた多數の器官がある。偶然を以て之を説明するには、ありさうにもないほど多數のチャンスに當にしなければならぬ。そればかりではない。たとへそれを以て生物の身體は説明され得るにしても、宇宙間に存する數限りなき生物や物体、その總體に見られる秩序、

その秩序の確乎不拔なること等を考慮に入れなければならぬ。偶然に原子と原子とが出遭して、分子を作つたとか、細胞と細胞とが邂逅つて組織を成したとか言ふが如きは、全然あり得べからざる所である。

秩序は偶然に成つたものでないとせば、必ずそれ相當な原因があらねばならぬ。論者はこの歸結を承認するが、たゞその原因をば、各體に在つて、その保存と發展とを確保する組織と、活動力との内的原因に在り、と主張する。然し、

哲學では「一切は己が善を目指して進むものだ」と曰つて居る。この傾向は、原子にも分子にも物体にも、それ／＼に顯れ、いづれも自己を保全し、破壊作用を防止せんとする。生物には此傾向が著しく見られ、自己を保存し、併せて生育を遂げんと努める。植物にせよ、動物にせよ、己が生命を保持せんとする上に、又向上、發展せんとし、人間に在つてはこの傾向が特に強烈である。

個体の保存と發展とは、環境に適應し、全体と調和してこそ確保せられるので、各個体の傾向は内的、特殊の秩序と共に、また外的、一般的秩序をも確保するものである。

斯くして秩序は説明されるが……  
然し右様な傾向は何處から生じたものであらうか。それは各組織の根原より流出するのだ。物質はエ

エネルギーを有する。そのエネルギーは「創造的飛躍」とか謂つた様なもので、之が無定形な物質を捉へて之を構成し、以て礦物界をなし、進んで植物界、動物界を形造り、人間界にまで向上するに至るのである。

假にさうしたエネルギーが物質にあり、そのエネルギーから秩序が生じたとして置かう、然しそのエネルギーなるもの、宇宙を押上げ、方向づけ、感嘆すべき秩序を生ぜしめるその所謂「創造的飛躍」なるものは、果して何處から生じたものであらうか。

物質や運動を説明せんとして、之を無始無終とし、獨りでに成つたのだと言つても、説明にならないが如く、宇宙の珍らしい秩序も、宇宙外に存する全能全智の原因に出るとせねば説明が出来ない。偏見を去り、虚心、坦懐、この諧調の妙を極めし宇宙を打眺め、魂の底に響く聲に耳を傾けたら、「秩序の第一原因、宇宙を秩序だてしその第一根元は、物質を作り、之に運動を與へし神に外ならぬのだ」と云ふ理性の答を聞き取ることが出来るであらう。

#### (四) 道德法を以て神の存在を證す

##### (其 一)

爛々たる星斗は我等の頭上に在り、

整然たる道德法は我等の心内に在り

兩者は絶えず感驚と尊敬とを呼び醒して止まない。

道德法とは良心に響き、善を命じ、惡を戒める義務の聲に外ならぬ。さうした聲が總ての人の心に鳴り渡つてゐる事は争ふべからざる事實で、誰だつて之を否定し得るものはない。固よりその聲が強大な權威を持ち、人に感驚と尊敬とを抱かしめるものであることは、恐らくさう判然と分らないかも知れぬが、少しく思を潜めて我と我胸に問ふ所があつたら、以て之を明かにすることが出来る。

負債を支拂はねばならぬ、人の物を盗んではならぬ、兄弟が困つて居るのを見ては、之を救はなければならぬ、嘘をついてはならぬ。一口に云へば良心が善と斷ずる行爲をなし、惡と定める行爲を避けなければならぬ。この義務感は判然と私の胸中に刻まれてある。今その特質はと云へば

第一、絶對である。



「虚言や、窃盗を避けよ。さもなければ人の信用を失ひ、心にも不快の念を覺えるに至る」とか、「世の信望を博し、成功を勝ち得んと欲せば、正義を守り、慈悲をなせ」とか、そんなことは云はない。その命令は何等の條件をも伴はない。全く絶對的である。義務を全うすると否とに従つて、得る所があるらうと、失ふ所があるらうと、人に尊敬されようとして、輕視されようとして、其等は問題ではない。「嘘をつくな、誠實であれ。是が汝の義務だ。汝之を爲せ。」、唯それだけである。

第二、その義務は避けるに避けられない。

時としては、随分嚴烈で、容易ならぬ努力と犠牲とを要求する。「歡樂に手を出すな。成程汝の爲には愉快であらうが、然し許されないぞ。斷然それを絶て」と禁止することがあり、「汝は年正に二十五歳、生の執着もあり、家族の係累もあらう。然し今や國家の非常時だ、一切を抛つて、戰線に就け、國防に當れ」と命ずることもある。飛び立つて従はなければならぬ。

時としてその聲は煩はしい。今少し優しくするか、妥協を容れてくれるかすれば、可さうなものだ、斷乎として我方の申入に應じない時は、壓潰して沈黙させたら、と思はぬものでもあるまいが、然し良心は平氣だ、冷然と構へ、味も素氣もなく、「汝の義務を果せ」と云つて動かない。よし夫れならば此方にも考がある、自分には友人が居る、彼は自分を愛し、自分の爲なら一命を抛つのも惜ま

ないと曰つて居る。自分は別に保護者を持つて居る、彼の地位は高く、その勢力は絶對である。彼の保護や同情によつて、自分はその犠牲を拂はされず、その困難な義務を免除され得ないでもあるまい。……然し良心は其等の威嚇に微懼ともしない。相變らず「汝の義務を果せ」と命ずる。その聲は友人や保護者の干渉よりも強勢である。

くるしくもくるしかりけりおもふこと

ならぬ心の我にしもあり

(其 二)

少くとも私は自由だ、良心は義務を命ずるが、然し強制はし得ない。私は依然自分の行動の主人公で、良心の要求に應じようと、それを拒絶しようと、其の邊は私の勝手だ。……固よりそれに相違はないが、然しその要求に應じないならば、それだけ君の價値は落ち、人格は下る。義務を果すに忠實であるだけ人格を向上させ、義務に怠慢であればあるだけ、自分の眼にすら拙らない人間となるのだ。二つに一つはどうしても免れ難い。この方面から考へても、義務は私に喰ひ下つてゐる。何時でも何處に於ても私を支配して放さないのである。

若し私が義務の聲に従ひ、良心の命令を正しく實行するならば、私は心に喜悅を感じる。あゝ、私も善いことを爲した。人間らしく、日本國民らしく行動したな！と思ふ。自分の目にすら一人前の人間になつたと見え、それだけ少からぬ満足を感じる。人がつねに「良心の喜び」と呼び做して居るのは正しく是である。實際、自分は義務を遂行した、謹んでその要求に應じ、良心に喜ばれ、その欣快を買ひ得た、確にさうだと思ふ時のその良心の喜びは、果して如何ばかりであらうか。

之に反して、若し良心の聲に耳を塞いだと云ふならば、様子が全く變つて来る。心中何とも知れぬ憂鬱を感じ、自分ながら我身の怠慢を恥ぢ、自分の人格がそれだけ下落して來たのを覚える。自分の行動はよくなかつた、自分は人間らしく振舞はなかつた、日本精神に背いたと、良心に怒鳴りつけられる。尙ほ自分は義務の遂行を怠りた。之を完全に尊重せず、その聲に従はなかつたので、自分ながら何となく見劣がせられてならぬ。自分は義務に對して債務者となつた。義務は自分に贖罪を課し、秩序を紊した代りに、その償を要求することゝなつた。この道徳的負債の感じ、この贖罪、この代償を支拂はねばならぬと云ふ感じは、もし怠慢が大であり、良心が鋭敏であるならば、それだけ容易ならぬ煩悶の種ともなるのである。其煩悶を免かれないと足掻いても、友人の親情や保護者の勢力に縱つて見ても、所詮駄目な話で、負債が出來、贖罪を要求される以上、それに應ずるの外はない。罪

過はその人その人のことで、之が代償も自分で擔當しなければならぬ。

斯の如く事を爲す前にも、爲した後にも、我等は道徳法の支配下に在り、その責任を免れることは出來ない。一口に云へば事前の義務、事後の責任、この二つは誰しも擔當しなければならぬ所である。

義務があり、責任がある以上、之を命じ、之に制裁を加へる權威がなければならぬ。その權威とは果して如何なるものであらうか。

(一) 言ふ人がある、それは進化によつて我等の心に生ぜし一個の觀念、一個の感情に外ならぬ。我等の祖先は最初個々獨立して生活し、道徳的良心など有せぬのであつた。然しだん／＼経験を重ねるに隨ひ、団体生活の有利なることを痛感し、こゝに相集つて社會を築くに至つた。然し共同生活を爲すには、どうしても相互の間に尊敬を拂ひ、援助を惜んではならぬ。例へば人を毆打せず、物を偷ます、相恤れみ、相援けて行く必要がある、さもなければ不都合を生じ、苦しい衝突をひき起すのみだと悟り、否應なしに之を實行するに至つたものである。斯くして利益と必要との觀念が少しづつ社會的實行と結び合され、その實行が終りには嚴重な義務となり、責任、制裁の觀念を生ずるに至つた。つまり良心は社會の頭首の權威と、その恐怖との理想化せし記憶に外ならぬのである」と。

論者の主張は單なる主張で、少しも證明になつてゐない。否、眞實らしくもない。良心の種子もなしに、良心の形成を説明せんとしても、證明にならうはずがない。……たとへ、その云ふ所が眞實であり、證明になつて居るとしても、問題はそれだけでは解決されない。たゞ或種の行爲に對して、それを果すと益を來し、怠ると不利を招き、罰を蒙ると云ふ觀念の發生を説明するに過ぎない。

然し我等は義務と責任との觀念を説明して貰ひたいのだ。動物は功利の感を有するが、義務と責任との觀念を有するのは人間のみである。前者より後者へ轉することは到底出來ない。若し論者の主張せるが如く、果してそれが出來るものとし、義務や責任の觀念は恐怖感の昇華したものに外ならぬとするならば、人はさうした「義務の偏見」を勝手に拋棄して、我儘、氣儘に振舞ふことも出來るはずである。さうなつては世の中に道徳法もなく、社會の存立も全然不可能となつて來るであらう。果して道徳法なるものは、さうした附帶物であらうか、むしろ人間の本質に備はつた、全く不可分のものではないか。

偽はらぬ心の聲や花の色

(2) なほ、良心の聲を以つて我等自身の聲なりと主張する人もある。「人間と云ふものは、本質上、偉大崇美にして、他よりその威嚴を借りる必要がない。義務を命ずるその聲の權威を説明するに

は、己自身の品位のみでも澤山である」と。

義務の公平、正當なるを承認するのに、理性の聲が義務の聲に加はることは可能であり、又實際でもある。たゞ個人的判断と普遍的な義務の聲とを區別しなければならぬ。義務の聲は、私の内心に聞え、恰も私より發するかの如く思はれもするが、然しその命令にせよ、制裁にせよ、私以外より來るのであることは、時として私の感情に反し、意志に逆つてまで命令を下すことがあるのを以ても、明である。私はその要求と私の野望との間に、明確な對立の有することを知る。してこの對立を隨意に解消せんと欲しても、到底不可能である。もしこの聲が私の聲であるとするならば、意の儘に之を歡迎することも、排斥することも出來る筈であるが、どうしても然うは行かない、義務は私を支配し、私が厭がつても、反抗しても、拒絶しても、依然として存し、始終私を督促して止まない。是を以て之を觀ると、この聲は私から發するのではなく、私以外の權威者より來るのだと云ふことを、つくつくと感ぜざるを得ない。

(3) 然らば、その權威は果して何物であるか？ 社會だらうか？

云ふ人がある。「良心は政治社會、若くは宗教社會の頭首より發せられし法律の反響であつて、責任なるものは、是等の頭首にたいする我等の從屬感より生ずるものに外ならぬ」と。

なる程、法典中には、幾多道徳法上の規定が成文法として織込まれてある。否、道徳法に合せ、我等が行爲の善惡に應じて、その賞罰をも規定してある。然し、その爲に兩者を混同し、自然的義務をば、或成文法に引戻すべきであらうか。否、兩者は決して混同すべきものではない。先づ義務の範圍は成文法のそれよりも遙に廣い。法律が命じ、制裁を加へ得るのは、たゞ外部の行爲のみである。一歩を進めて、私の思、私の感情を取締らうとしても、私は當然それに異議を申たてることが出来る。私の魂は閉鎖された領域で、私は如何に高位高官の人にも、之に踏み入る權利を認めない。却つて道徳法は、この領域にまで勢力を振ひ、内部の感情も外部の行爲も等しく之を取締ることが出来る。

その上、この領域内では、外部の行爲にも區別が存在する。萬一法律が良心の非とする行爲を命ずることがあるとせよ、良心は必ず起つて異議を申立て、その命令を拒絶する。その良心の權威は法律の夫よりも強大にして、私は必ずこれに従はねばならぬ。世の立法者より出る命令と、良心より來る命令とは決して同一ではない。同じく人間の立てた賞罰と、良心の喜び、若くは咎責とは全然異なる。是れによつて之を觀ると、道徳法の權威は、社會からではなく、より高い他の方面から來ることが明白であらう。

要するに、道徳法中に見られる權威なるものは、社會より出るに非ず、人間より來るに非ず、自然より生ずるにも非ず、其等とは全く異り、其等の上に超越して居る。之を修正せんと試みる人があつても、依然として動かない。之を廢絶せんと欲しても、飽くまでそれに抵抗し、何時になつても、その權威を失墜しない。

然らばこの權威！ 凡ての人間權威の上に超越し、良心内にまで浸徹し、人をして尊敬と感嘆とを禁じ得ざらしめるほどの權威を有するこの權威は、果して如何なるものであらうか。

いくら尋ね求めても、盛に議論を闘はしても、問題をひねくりまはしても、我等の良心に道徳法を刻んだ御方の存在を拒否することは出来ない。其の御方を我等は神と稱する。故に神は必ず存在する存在しなければならぬ。

いつはらぬまごゝろの聲いかにして

いつこよりやは聞えくるらん

(五) 人心のあこがれを以て神の存在を證す

(其 一)

「一切は己が善を目指して進むものだ」と哲學者は曰つて居る。「己が善」とは、各自のあこがれに應じ、その要求を満し得るものに外ならぬ。随つて、この善は各自の傾向、其の性質の如何に従つて異なり、植物の善があり、動物の善があり、人間の善がある。

今、人間の善とは果して何であらうか。それを知るが爲には、先づ人間のあこがれ、この善が満たし得べきあこがれを調べて見なければならぬ。凡そ人間固有の傾向——他の動物と區別され、眞の人間たらしめる傾向——は智・情・意の三つある。如何なる人も、知らう、愛しよう、その知り且つ愛する所を樂まうとするものである。しかも、このあこがれは有形的傾向とは違つて、無制限である。一定の境を知らない。胃は充分食物を攝り入れると、忽ち飽を來し、更に欲する所なしだが、知は得れば得るほど欲しくなり、知れば知るほど知りたくなる。絶えず目醒めて、何時になつても満足しない。知的好奇心、その好奇心の「懐み」を學者はよく物語つて居る。情も愛も同じく然うで、愛すれば愛する程、いよく愛したい。樂めば樂むほど、ますます樂みたい。經驗はそれを吾人に確證して

くれる。

右のあこがれは、その強度に於て無限なるのみならず、期間に於ても同じく無限である。永久性を持たない知識、一時的愛情、一時的歡樂には、どうしても満足されない。確實な知識を掴みたい、愛も樂も永遠でありたい。言ひ換へれば、「絶えず、何時までも」と云ふのを標語として居るのである。要するに、人間は永遠の眞、永遠の美、永遠の善にあこがれて居る。全的光、全的愛、全的歡樂を指し、無限の善に向つて進んで居るのである。

事實は斯うであるが、さてそのあこがれの性質は如何と云ふに、それは實に普遍的で、如何なる人にも見出せるものである。無論、すべての人が、はつきり之を捕捉へて居ると云ふ譯ではない。例へば兒童や、野民や、一般大衆やは、「無限」と云ふ概念すら持たない。況して的確な冀望を抱いて居らうはずがない。彼等の夢想は、もつとく地味な形を取つて居る。彼等はたゞ幸福でありたいと望んで居る。幸福でさへあるならば、それで彼等には澤山である。幸福！是ばかりは凡ての人のあこがれである。時の古今を問はず、洋の東西を論ぜず、老若男女、貴賤貧富の別なく、人間は皆幸福にあこがれて居る。

さて、この幸福へのあこがれを解剖して見ると、つまり無限へのあこがれと同一であることが分

る。實に幸福であるとは何かと云ふに、自分のすべての望みが満され、その満足を樂むことではないか。然し十二分の満足を樂むが爲には、何を必要とするのであるか。

現世の財か？ 然しその財は有限であり、隨つてまた不完全、不安定であり、我等のあこがれを満たし得ないことは經驗が之を證明した。又毎日證明して居る所である。幸福の條件は、完全に安定なる財、言ひ換へれば、無限の財に存するのである。さすれば幸福を冀ふ人は無限を目指して進む人である。して幸福へのあこがれは普遍的であるから、無限へのあこがれも、間接ではあるにせよ、また實に普遍的であるとせねばならぬ。

次に、このあこがれは必然的である。即ち人間性固有のもので、人間を特徴づける所以のものである。之が無くては、人間も人間ではない。人間が人間たる所以は、これあるが爲である。今このあこがれを持たない人があるとせよ。彼に残るのは、たゞ有形的、動物的傾向のみで、なる程その傾向によつて身體の發育を計り、その物質的幸福を求めるとは出來ようが、一步その境を乗り超すことは出來ない。彼は動物でこそあり得ようが、然し人間とは謂はれない。

人間の人間たる所以は、肉體的發展の段階を超越え、より高い段階、魂の發展のそれに經上ると云ふのを條件とするのである。然しこの水準面に上らしめるものは、何であるかと云へば、それ

こそ道德的であこがれ、有形、有限の善が満足せしめ得ず、その全精力を盡して、無形、無限の善、人をして地の上に背伸びをさせ、無限に方向づけさせる無形、無限の善を目指して進ましめる道德的であこがれで無くて何であらう。要するに人間の人間たる所以は無限へのあこがれに在るのである。

無限へのあこがれは、必然的、且つ普遍的である以上、また自然的であらねばならぬ。

反對を主張し、それはたゞ高等文明と共に顯はれたものだとするのは一例へば現代文明に於ける慰藉、安樂の要求の如く、その要求がすべての人、野蠻未開の民にも存することも、その必然的なことも考慮に入れて居ない。後天的に求めた要求だと、存することも、存せざることも有り得るので必然的とは謂はれない。して見ると、我等は生れながらにこの憧憬を持つて居る。このあこがれは我等の筋肉に附隨して居る。別言すれば、我等の自然に備つて居る。隨つて自然的であると謂はなければならぬ。

咲く花やかげによりくる人心

(其 二)

無限へのあこがれは、人間の性情に基き、自然的である。既に自然的であるから、また眞實であり

無限物の存在を必要とする。實に自然は—こゝではたゞ宇宙の構成力と云ふ意味に取つて戴きたい—賢明である。無駄なことは何一つ成さない。特に豫見せざる要求を人に與へることなく、既に之を與へたからは、またその要求に應ずるだけのものを提供する。なるほど個々に就て言ふと、何か特殊の事情により、その要求を充たし得ないことも有るにはあるが、然し全體として、又平常の條件に於ては、必ず之を充たすのである。

見よ、植物は發育成長したい傾向を持つて居る。その爲に水分と炭酸瓦斯とを要する。根毛は土中に水分を見出して之を吸ひ上げ、葉は表面の氣孔より炭酸ガスを取り、その中の炭素と根から吸ひ上げた水分とを原料として澱粉を作り、成長の資料とする。

斯の如く、田圃に育つ禾本科より山林に成長せる松柏に至るまで、水中の藻類より岩の上の苔に至るまで、その發生する季候の如何に拘らず、春の莖でも秋の菊でも、その地帯の寒熱如何を問はず、赤道直下の椰子にせよ、北極圏内の地衣にせよ、皆それ／＼に必要な資料を見出して居る。然らば自然は植物の求めに應じて、必要なものを總て供給して居ると謂はなければならぬ。

動物とても同じく然うで、營養には食物を、呼吸には酸素を必要とする。然るに動物と云ふ動物は地中の昆虫でも、水中の魚でも、空中の鳥にせよ、地上の獸類にせよ、皆その生を營むに要する食物

を得、酸素をも見出して居る。酸素を得て呼吸作用を營むのに、獸類と鳥類とは肺を以てし、魚類は鰓を以てし、昆虫類は呼吸管を以てする。要するに動物は同化作用と呼吸作用との二つを組合せて生命を保存し、之を發育せしめるのである。

斯の如く動物は各自の要求を充たすに足るべきものを容易に見出し得る。その身長の如何を問はず小な蟻類だらうと、巨大な鯨類だらうと、その體制が簡單であるにせよ、極めて複雑に出來て居るにせよ、その環境が地中、若くは地表であらうと、水中若くは空中であらうと、自然の置いてくれた地方に於て充分に己が要求を充たすことが出来る。然らば自然は動物の要求に應じ、必要なものを供給して居ると謂はなければならぬ。

今人間は如何？ 植物や動物と同じく、人間も身體の要求を充たし、その生命を繋ぐに必要なものは容易に之を見出すことが出来る。然し道徳的生命を保證すべきもの、その魂のあこがれる眞善美を充すに足るべき無限物に至つては、すべて之を見出して居るだらうか。自然も是までは極めて利巧に立廻つて居るが、最後の大團圓に至つて失敗して居ないだらうか。下等動物の爲には一切を程よく安排しながら、自然界の傑作たる人間の爲には、何うすることも出来ないのではなからうか。人間の低級な要求は之を充たし得るものゝ、たゞそれだけに止つて、道徳的あこがれは之を満足させ得ないの

だらうか。植物の爲にも、動物の爲にも、立派に成功して居るのに、人間だけを、萬物の靈長と仰がれる人間だけを出來損ひに終らしめるのではないだらうか。高潮は日輪と月輪とが雲の上に御臨御になつて居ることを告げるのであるが、たゞ人間の魂の高潮だけは、空虚な天に向つて搖蕩して居るのであらうか。

其様な假定は、どうしても眞實らしくも思はれない。萬物は悉く成功して居るのに、たゞ人間だけが失敗に終つて居るとは、何としても信じられない。然らば我等の道德的あこがれの對象として無限の善が存在しなければならぬ。然り、我等の道德的あこがれを満足させ、我等の知、情、意にそれ／＼眞、善、美を提供し得る無限の實在、己自身に眞、善、美を綜合せる者、否、眞、善、美そのものたる無限の實在が必ず存在せねばならぬ。この實在を名づけて我等は神と稱する。故に神は必ず存在せねばならぬ。

眞、善、美や神の泉の春來る

### (六) 各民族の信念を以て神の存在を證す

(其 一)

各民族は神の存在を信じた。今もなほ之を信じてゐる。斯く言へばとて、世の中には嘗て無神主義者が居なかつた、今もさういふ人間は一人も居ないと斷言する考ではない。事實を無視する譯には行かない。たゞ我等は汎論するのみである。廣い世界には隻手しか持たない人も随分見受けられるが然し人は皆兩手を持つてゐると斷言しても、誰とて異論を挟み得るものは居ないだらう。されば、たとへ無神主義者が多少居ないではないにせよ、人は皆神の存在を信じてゐると斷言したからとて、毫も差支ない譯である。

神は存在する

問題を明確にするが爲に、今一つ附言して置きたい。この信仰の對象たる「神」は必ずしも同じ性質を有する必要がない。佛教徒の神と、神道家の神と、回教徒の神と、基督教徒の神とは必ずしも同一ではないにせよ、少くも根本的觀念に於て一致すればそれでよい。之を一種の神の力となすか、何かの靈體となすか、何れにせよ、宇宙を支配し、人間の運命を左右するものと信じ、之を禮拜、崇敬し、之に祭祀を献げ、その心を宥め、その祝福を求めんと務めることに於ては皆一致してゐるのである。



歐米の基督教徒が、人間を始め、天地萬物を造り、之を保護し給ふ神の存在を信じて居る事は、喋々を要せざる所である。アジアの現代人は大多數基督教徒でこそないにせよ、濃厚な宗教心に浸つてゐる。回教徒がその神をアラーと呼び、篤く尊信してゐる事は人の知る所である。印度教や佛教は、無神、無靈魂説を唱導してゐる様だけれども、また梵天を信じ、阿彌陀や、大日如來の如き人格化した神を説き、儒教では天、もしくは天帝を信じて居る。我國の神道にしても、皇室の御先祖や、忠臣義士の靈を祀つて居るにせよ、また天の御中主の神を天地萬物の創造主として崇敬してゐることは隠れもなき事實である。

古代の開化民も同じく篤い宗教心の持主であつた。ローマ人は多神教徒でこそあつたにせよ、その神々の中にも、ユピテルを主神として、之を崇敬したものである。ギリシア人も亦オリンピア山上に羅列せる神々を崇敬して居たが、之が首座にはゼウス神を据ゑ置き、そのゼウス神が一たび眉をひそめると、世界は忽ち震撼すると信するのであつた。アッシリア、バビロンには、各都市にそれ／＼守護神が居ただけけれども、それ等第二流の神は國家の守護神、バビロンではマルドウク神、アッシリアではアツスル神に服したものである。エジプトではアムラを萬物の創造主、神々の首領と尊ぶのであつた。

斯くの如く、時の古今を問はず、洋の東西を論ぜず、文化の民は皆神を尊信したものであるが、野蠻未開の民は如何、彼等の智力は停滞して、格別進歩する所がないのだから、その宗教思想も昔から餘り變化してゐない。今日から推して彼等の過去の過去を斷じ、原始時代の宗教信念をそのまま傳へてゐるものと思つても大過ないであらう。彼等の宗教を研究するの興味はこゝにあり、最近頃にこの方面の研究熱が盛になり、その研究より得たる最初の結論は、原始人が極めて低級、蕪雜な思想しか抱いて居ないのだと云ふそれであつた。然るにより深く、より精密に調査を進めた結果、今日では全然對蹠的な結論を導き出すに至つた。濠洲東南端の土人は今猶ほ石器時代に在るのであるが、それにも拘はらず、比較的高度の宗教信念を抱いてゐる。彼等は一個の最高者、萬民の父の存在を認め、之をバイアメ (Baime) だの、ブンジル (Banjil) だのと呼んでゐる。赤道直下のアフリカに住めるピグメ族は萬物の作者にして、天に住み、倫理道德を司るブルガ (Pulga) の存在を信じ、バントウス族 (Bantous) は全能にして人間を造り、生命の主たるレラ (Lera) を識つて居る。北アメリカのインヂアン族は惡を爲すことなき善神と、罪を處罰する義神との二元説を奉じ、南アメリカのインカ族 (Incas) は最高者をウイラコチア (Viracocha) と呼んで禮拜してゐる。兎に角、文化の低い野蠻味な民族は、比較的高度の神觀を抱いて居り、却て隣民族と往來して物

質文化の向上を來せし民族は、倒にその信念を墮落さして居るのを見るのが少なくはない。然し如何に物質化した民族間にも、決して神の觀念は消滅して居ない。殊に原始的人間界には廣く一般に行き亘つてゐる。

之を要するに、蠻族の間にも、文化民の間にも、異教社會にも、基督教社會にも、神の觀念は見出される。之を長く縦から眺めても、廣く横から覗いても、到る處に神の觀念を突き留めることが出来る。神の存在を信じない民族は、古往今來、未だ嘗て見ざる所である。

花咲かぬ山の奥にも祠かな

(其 一二)

各民族の信念は果して如何なる價値を有するのだらうか。この信念の全般的なるは、以てその眞理なることを證明するに餘あり、と人はよく言つて居る。實に古今東西の諸民族が悉く迷つて居る、何時でも、何處に於ても非眞理を以て眞理なりと認めて居らうとは何うしても思はれない。固より何等實行上に關係のない純然たる理論、例へば天動地靜説の如きものに關してならば、コペルニクスやガリレオが出る迄は、全世界の匹夫匹婦は言ふ迄もなく、博學宏識の大家に至るまで殆ど残らず誤つて

居たが、然し吾人の言ひたいのは、重大な實行上の結論を伴ふ眞理に就てである。

神を認めるか認めないかによつて、人生の意義は全く一變して来る。神が果して存在するものならば、人は必ず之に服従し、其教に従ひ、その誠を守らなければならぬ。然し万一神が存在しないものとせば、人は獨立獨行で、我儘氣儘に振舞つても、國法に違反しない限り、誰あつて之を制肘し得るはずが無い。是ほど重大な關係を我等の日常生活の上に及ぼす眞理が他に一つとして存在し得るだらうか。

我等は世界の各民族が神を信じて居ることを事實の上から證明した。然らばこの信念、行動の自由を束縛し、厳しく惡を戒しめ、徳を命ずるこの信念は果して何處から起つて來たものだらうか。それは歴史に基き、君主が治國平天下の都合上より之を吹き込み、之を植えつけたのだと言ふ人がある。この假説は信念の普遍的なることを説明するに足りないのみか、事實に矛盾するを如何せんやだ。神の存在の信念は時間の上から見ても、空間の上から論じても、普遍的で、特に原始的民族間に最も生々しい證據を見出すことが出来る。しかも彼等に見られる道徳は或種の文化民、例へばギリシヤ人、ローマ人間に於ける夫れよりも遙に純潔で、進化は上昇しないで、むしろ下降して居ると云ふの外はない位である。

然らば人類の搖籃時代に最も純正であつたと見えしこの信念は、果して何處から起つたものであらうか。人智が宇宙の壯麗、美觀に驚き、その因つて来る所を尋ね、斯くてその第一原因に辿り着いたためであらうか。或は神が自ら世の人に之を啓示し給うた結果であらうか。兩者いづれも眞實らしく又眞實でもあり得る。神の啓示があり、人智もまたその啓示に就て研究を重ねたことは、當らずと雖も遠からずではあるまいか。

なほこの信念の持久性より有力な證據を取り出すことが出来る。如何なる難問にも互解せず、如何なる批判にも抵抗して動かぬ持論は眞理である。もしその持論が非眞理であり、空論たるに過ぎないならば、決して厳正な審査、峻烈な検討に堪へ得るものではない。それこそ石炭玉の如きもので、批判は忽ち之を貫き、容易に之を破裂させる。之に反して鋼鐵の如く、ダイヤモンドの如きものであつたら、打たれても、叩かれても、ます／＼その硬度を増し、その輝きを加へるのみであらう。例へば人間の中にも奴隸と生れるものがあり、自由民となつて育つものがあるのは、皆その性質が異なるからだ、と云ふ説は、随分ギリシア、ローマ時代には行はれたものであつた。然しこの説は審査に抵抗し得ず、批判に破れ、人間性の平等なることは試験済となつた。その反對に人間の自由は随分と否認もされ、異議も申立てられたが、其等の否認や異議によく抵抗し、理論上之を否認する人も實行上に

は之を擁護して居ると云ふ鹽梅。されば批判への抵抗力は以て確實な眞理の證據とすることが出来る。しかも其批判が久しきに亘り、厳正にして峻烈を極めたものであればあるだけ、その眞理はいよいよ確實となる譯である。神の存在にたいする信念こそ正しく然らうで、この信念ほど各方面の批判を惹起すべき質のものは他に一つも無い。

先づこの信念は、人智の爲に頗る邪魔くさく思はれてならぬ。果して神が存在するものとせば、その神に関する論議は大に制限を受け、造物主を排斥する様な説は、すべて之を否定、棄却しなければならぬ。自由に考へ、自由に提唱し、自由に論斷することは許されぬ。神の信念はたゞ人智に邪魔くさいばかりではなく、心情には一層迷惑である。一たび造物主を認めた上は、我儘氣儘に生活し、自由に行動してはならぬ。謹て神の誠を守り、その思召に従はなければならぬ。神の意に反して、快樂を追ふことを禁ぜられ、むしろ己に暴力を加へよと命ぜられる。神はたしかに厄介な代物だ、出来ればこの厄介な代物を遠けたい所から、思ひ切つた、大膽不敵な批判を之に加へる無神論者は何時の世にも絶えない。ギリシアには詭辯家が居り、ローマ帝國の末期には唯物論者が輩出し、文藝復興期は不敬神家を、佛國革命は熱狂せる暴力團を簇出せしめた。今日でも實證主義の哲學者連になると、「神は不可知で、科學の對象に非ず」と叫んで、之を片付けて了はうと努めて居る。ロシアやメキシ

コ等では「神なし—Sans Dieu」と云ふ赤い旗を押し立て、堂々と神に宣戦状を叩きつけ、世界から神の御名を抹殺し去らんものと、大童になつて狂奔して居る。

然し是等の批判や、妄動や、宣戦の結果如何と云ふに、古今を貫き、東西に亘り、何時も、何處に於ても、神への信念はいよ／＼盛に燃え擴がり、いよ／＼遠く廣く行き亘つて居る。もし果して何等の根據もない空虚な信念だとせば、斯る異論に亂打され、攻撃されては、到底何時までも無難たること能はず、早や疾くの昔、一場の夢物語と化し去つたに相違ない。故に神は必ず存在せねばならぬ。さみだれや神の光をかくす暗黒

### 結 論

神は存在する。存在せざるを得ない。人生のすべての價值、すべての明るさは、全く之より来る。

萬一神が存在しないものとせば、人生は如何に悲惨極まるものであらうか。その感情や、理性や、意志や、理想やの叫び、道德的、社會的要求の叫びは、現世の財寶を以ては到底滿され得ない。その要求の叫びは餘りにも廣大であり、しかも現世の財寶は餘りにも小さい。被造物のみに局限された人間は結局未成品であり、不具者であり、不幸極まるものである、と謂はなければならぬ。

之に反し一たび神の存在を認める日になると、局面は全く一變する。完成と幸福との可能性がこゝに出現する。弱い人間には、陰險な手段、恐るべき暴力にたいして保護の必要がある。然るに神は人間の創造主であり、萬物の最高主である。その愛する人間に如何なる援助をも與へ得る。理智には人生とは何ぞや、何を目的とすべきかと云ふことを知らしめる必要がある。然るに神は全智に在して、その有する知識を幾程でも提供することが出来る。意志もフラ／＼と倒れ易い、賢明且つ有力な支持を要する、然るに神は慎重にして全能、何時でも必要な助力を與へ得ざるなしである。感情は互に無量の愛を交換する歡喜を欲する。然るに神は善美そのもので、最も親むべく、頼とすべき友である。良心には、惡は決して最後の勝利を占め能はぬ、徳は必ず報いられる時が來ると云ふ保證を與へられねばならぬ。然るに神は正義そのもので、道德的秩序を確保し給ふのである。感情は恭謙にして親切な社會を必要とする、所で神は權利であり、愛であり、神によりてこそ世界に正義と愛とが勢力を振ふに至るのである。

斯の如く神は我等のすべての要求を満足させ得る最高善である。理智はその存在を斷言し、立證すると共に、またその徳の無限なる、その生命の豊富なる、その約束する幸福の無制限なることをも瞥見する。然り、理智の目に映する神は、唯一の必然物であるが、また唯一の願望すべきものでもあ

結

るのである。

然しこの豫見、この希望は果して實現せられ得るだらうか。理智はよく之を推測するが、然しそれも一個の謎として、或種の幕を透して覗くのみに過ぎない。その幕を取拂ひ、人をして神の内面生活に親ましめ、その希望の實現を見せしめるものは信仰である。我等は本書の讀者が一步を進めてその信仰の門を叩き、その堂に入られんことを希望して止まないものである。

うつせみの世のことごとくに光ある

神をおきてはやみとこそ知れ



昭和十五年十一月一日印刷  
昭和十五年十一月十日發行

定價三十錢  
郵税三錢

著者兼發行者 長崎市南山手町乙一番地  
浦川和二郎

印刷者 神戸市林田區五番町七丁目六〇番  
白井朝市

印刷所 神戸市林田區五番町七丁目六〇番  
明星舎印刷所  
電話湊川⑥三七一六番

發行所 長崎市南山手町  
敎報社

振替口座福岡一八二一九番

408  
410

終

